明治三十九年一月二十五日發行（明治二十年一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百九拾四號

第三種郵便物認可 明治廿六年四月四日
每月一回二十七日發行
内務省許可 明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衞生雜誌

第百九拾四號目次

二月例會告知

來二月三日第一土曜日午後一時半より神田區一ッ橋通女子職業學校に於て例會相開き（晴雨共）ドクトル富士川游君には左の有益なる項目に付き當分引續き每會講話せらるべく講話中多數の畫圖標本等を交へらるべし次に土田ドクトルには豫て留學中の處最近歸朝せられたれば從て新說も有之べく候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會有之度候也

疾病の話　ドクトル　富士川游君

（一）疾の發端（二）動物の病と人間の病（三）野蠻人の病（四）我邦神代の病（五）我邦各時代の病（六）我邦特有の病（七）文明人の病（八）流行病（九）傳染病（十）職業病（十一）男子の病と女子の病（十二）小兒の病と老人の病（十三）富者の病と貧者の病（十四）疾病の豫防（十五）疾病の治療（十六）治療の方式（十七）疾病の治癒（十八）醫術と藥品

演題未定　ドクトル　土田卯三郎君

●本支會々員方へ

今や日露戰役も終了を告げ平和に相成候に就ては集會の際は可成多數出席せらるゝ樣致度候に付御知人をも御誘導御參會被下度候又役員方御缺席の場合には誰なり共代理の御方を御出しに相成る事は出來不申候や講師多忙の身にて草案を起し有益なる講話を試みらるゝもいつも一部少數の傍聽にては本會の素志に悖り且講師に對しても如何にも御氣の毒の感有之候間今後は本支會役員は勿論會員御一同の御奮發により戰後の發展として大に會運を隆盛ならしむるとに御盡力あらんと希望の至に堪へず候玆に會長の命を受けて本會及支會々員諸姉に謹告致し候也

明治三十九年一月

私立大日本婦人衞生會

新年早々賀狀を賜りたる諸姉の芳名を掲げ御厚意を謝す

（三日後の分は餘白なければ掲載を見合せ失禮仕候）

私立大日本婦人衛生會

謹んで新年を賀し奉る
併て貴會のいや榮えに榮え行かん事を祈る
明治三十九年一月元旦
松山 高田 直

謹て榮へ行く御代の新年奉賀
明治三十九年一月元旦
神戸 前川 てる

つゝしみて新らしき年をほきまつる
明治三十九年一月元旦
長野 石川 すみ子

謹賀新年
明治三十九年一月一日
日本橋 よし ゐ

恭賀新年
明治三十九年一月一日
福岡 猿渡 徹

謹みて新年を賀し奉る
明治三十九年一月元旦
尾道 吉富 志茂子

つゝしみて新年のよことほきこえあけまつる
明治三十九年一月一日
相州大磯 西 升子

謹みて新年を賀し奉る
併て本會の御盛榮を祈る
明治三十九年一月一日
長野 横内 岩子

新年のことほき日出度祝納まいらせ候
明治三十九年一月二日
大阪 岡田 美談子

恭賀新年
明治三十九年一月一日
北豐島 鈴木 禮子

謹賀新年
明治三十九年一月一日
山形 高木 智江子

恭賀新年祝貴會隆昌
明治三十九年一月一日
越後 内山 恭子

恭賀新年
明治三十九年一月元旦
廣島 林 くま子

恭賀新禧
明治三十九年一月吉日
松江圖書館長 木幡 久右衛門

謹賀新年
明治三十九年一月二日
羽前 米澤 支會

新玉の御壽目出度御祝ひ申納候
明治三十九年一月一日
本郷 關野 秀子

恭賀新年
明治三十九年一月一日
長崎 池田 讓

謹賀明治三十九の新年
併祈大日本婦人衛生會員諸姉の健全
明治三十九年一月元旦
新潟 本山 捨五郎

謹て新年を賀し奉る
併て貴會の益々隆盛を祈る
明治三十九年一月元旦
石川縣 久保 登茂

謹賀新正
併て本會の隆盛を祈る
明治三十九年一月一日
新潟 支會

つゝしみて新年を賀し奉る
明治三十九年一月元旦
京都 仙田 花子

新ら玉の年の始をことほきまつる
明治三十九年一月元旦
山口 植村 妙子

新春の御慶目出度祝ひ納め候
明治三十九年一月一日
堀 雪野

恭しく新年の御ことほき聞へまつる
明治三十九年一月一日
伊豫 伊藤 長子

謹賀新正
併平素謝疎遠倚貴會之祝隆盛
明治三十九年一月元旦
山形 鈴木 よし子

新玉の年の始をことほき奉る
明治三十九年一月元旦
八王子 神尾 きい子

新玉の年のはじめの御壽幾千代かけて御目出度申納候
明治三十九年一月一日
長野 蜂屋 せん子

謹賀新年
明治三十九年一月一日
贊成員
松山 漆原 兵吉
全 せい子
岡本 友代子

のどけき初春の御祝申納候
明治三十九年一月
東京北品川 南條 榮子

新玉の年のはじめの御壽御めで度申納候
明治三十九年一月元旦
高木 操子

恭賀新正
明治三十九年一月吉日
高崎 支會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみならずして足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらざれども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も／＼衛生の法は一にして足らずといへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相寄て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に歡ばしきことなりされども其の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるもの丶如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志の婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演説談話を乞ひ互に相研究し傍之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふぐこととしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を増進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方には便宜支會を設く●第三條　本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會するを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付す（交付手續從來に詳なり一入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に評議員を置き其中より總裁一名を推し皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、顧問若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の指揮に依り會長之を認む但書記は會長に於て會員外の婦人若くは男子に囑託することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補け會務を掌し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は[illegible]役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　[illegible]評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演説談話を請ひ[illegible]

[illegible]●第卅四條　會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは勸告することあるべし

事務所　東京市牛込區上宮比町八番地　私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃 周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 濱尾作子
（いろは順）
幹事 鳩山春子
仝 羽田三緒子
仝 岡田龍子
仝 高木かう子
仝 山本多穂子
仝 松平芳子
仝 三浦教子
評議員 石川貞子
仝 岩下ゆか子
仝 濱田捨子
仝 長谷川仲子
仝 仁禮壽賀子
仝 西升子
仝 穂積歌子
仝 土肥多越子
仝 緒方悅子
仝 岡山とし子
仝 小川孝子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山繼子
仝 吉武輝枝子
仝 丹波貞子
仝 高橋寧子
仝 田村きよ子
仝 相馬隆子
仝 男爵夫人 南部郁子
仝 中濱芳子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 岸逕子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

（●は本會に於て講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學士 ●伊東祐彦君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
赤十字社内科醫長 ●岩井禎造君
醫學士 石原久君
醫學士 ●磐瀬雄一君
醫學士 ●石原喜久太郎君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 荻原潤四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
●長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 ●小原鐵之君
醫學博士 ●岡田榮吉君
醫學博士 ●林春雄君
醫學士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君
陸軍步兵中佐 ●堀内文次郎君
醫學博士 ●土肥慶藏君
醫學博士 ●岡田和一郎君

醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩田重信君
醫學士 若杉喜三郎君
男爵 ●加藤弘之君
ドクトル ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 ●川上雅武君
醫學士 ●櫻田儀一郎君
醫學博士 ●金杉英五郎君
醫學士 ●笠原光興君
醫學士 ●唐澤光德君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寛君
法學博士 高木豐三君
醫學博士 ●田代義德君
新潟 ●田代亮助君
男爵 高崎正風君
醫學士 ●竹中成憲君
醫學士 ●高山耕安君
新潟病院長 ●高橋良五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋貞頑君
藥學博士 ●田原良純君
醫學士 ●田村光郎君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 ●米山彦郎君
二等軍醫正 ●星野德光君
醫學士 ●宮本俊君
三等軍醫正 ●横井忠國君
大日本教育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部靜男君
藥學博士 ●長井長義君
醫學博士 ●中濱東一郎君

醫學士 ●黒田玄通君
醫學士 ●栗本庸勝君
海軍中佐 ●小笠原長生君
醫學士 村松鐵三君
醫學博士 ●服部宗繩君
醫學博士 栗本東明君
醫學士 ●山田誠三君
醫學士 ●山田弘倫君
醫學士 ●山根正次君
岡山 ●山川榮二君
醫學士 ●丸茂文良君
植物生理所長 丸山長四郎君
ドクトル ●松山陽太郎君
ドクトル ●小此木信六郎君
盲啞學校長 ●小西信八君
廣島 小泉賀君
醫學士 ●吉川榮君
東京 布施正顯君
臺灣民政長官 ●後藤新平君
東京帝國大學教授 ●エ、ベルツ君
醫學士 ●甲野棐君
文部書記官 ●寺田勇吉君
醫學士 ●寺田織尾君
醫學士
顧問 秋元與卓君
前軍醫總監 ●足立寛君
ドクトル ●新井吉芳君
ドクトル ●富士川游君
高崎醫會長 土谷全次君
產科婦人科 ●水原衛君
ドクトル ●久保田誠磨君
醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 ●淺田次君
醫學博士 ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山義六君
高崎 秋田聰太郎君
醫學博士 ●佐藤三吉君
醫學士 ●横井郁二郎君
醫學士 ●佐藤恒久君
ドクトル 佐伯理一郎君

醫學博士 ●納頴次郎君
醫學士 ●綿保三郎君
醫學士 ●櫻井恒次郎君
醫學博士 ●楠淵鋭次君
醫學士 ●北村精造君
醫學博士 ●北島多一君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學博士 ●木下正中君
醫學士 ●北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●眞作作吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學博士 ●三輪信太郎君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●日高君
ドクトル ●須田卓昂君
醫學士 ●富川健君
醫學博士 ●木村健高君
醫學博士 森休太郎君
醫學士 ●舘川三男三君
醫學士 ●波多野淳君
醫學博士 ●吳秀三君
ミス ●ヒウースス
ミセス ●コーツ
ドクトル ●若池循一君
醫學士 ●橋本左武郎君
醫學士 ●鳥居春洋君



私立大日本婦人衛生會幹事（會計主任）

法學博士高木豐三君夫人　高木鐐子

婦人衞生雜誌第百九拾四號
（明治三十九年一月二十五日發行）

名家演壇

脂肪病の話

醫學士　橋本左武郎君演述
伽速記事務所員速記

私は今日此の席に於て御話をすることを深く光榮とする所でございます、前回に一遍消化の御話を致した事がございますので、尚ほ機會を得ましたならば、食物の事に就て御話をしやうと云ふ考でありました、デ今日は丁度何か講話をやるやうにと云ふことでございましたので、食物の事でも御話を致したいと考へました、けれども食物の事は實はナカ〳〵六ケ敷うございます、勿論此の脂肪病と云ふ事も、食物と大變な關係を有つて居ることで、謂ば食物の話の一部分と云ふても宜しうございますが、日本ではまだ此の食物の研究が――醫學上からの日本の食物の研究が甚だ行屆いて居ない樣に考へられます、西洋では隨分此の研究は進んで居りますが、と申しましても此の西洋の研究を直ぐ樣持つて來て、飜譯して御話しました所で一向何の興味もない事である、と云ふものは御承知の如く總て其の土地の狀況からして風俗氣候習慣に依りまして各々其食物と云ふものは、固有の食物があるものでございます、チヨットしても寒帶の人は、寒いだけに夫れ相當に脂肪に富んで居る食物を好む、溫帶の方は割合に淡白な食物を好むと云ふ樣な事は、夫れ〳〵其の土地の氣候に從つて、それに相當するだけの準備をしたものと見なければならぬ、又例へば西洋の人などは一日に數回食物を食べる習慣があります、即ち朝起きますと珈琲に麵麭の樣なものをやります、九時頃にフルースチュック、朝飯を食います、それから一時か二時頃に晝飯を食べる、四時頃になると又珈琲に菓子等を食べます、又

七時か八時には夜飯をやる、又事に依ると十時か十二時頃に、寐る時に珈琲に菓子を食べる、斯う云ふやうに少しづゝ度々食べる習慣がございます、それで病人などは食慾のない時には、少しづゝ數回に一日何回にもやる事が宜しいと云ふことになつて居ります、然るに日本ではどうも少しそれと違う樣に考へます、と云ふものは、一體此の日本では食物は三食としてあつて、間に食べるのは間食として實は餘り宜い事でないとしてある、若し病氣であると寧ろ此の間食と云ふ事は止めさせる風習になつて居るのである、斯う云ふ風でありますから、私共か平日此の西洋流を持つて來て、少しづゝ度々食べさせると云ふ事を施して見ても、時としては大變巧くいくこともありますが、どうも西洋人の樣にうまくいかない樣に考へられます、

是は近頃の一つの御笑ひ話でありますが、斯う云ふ馬鹿らしい事があつたのです、或る田舎の山の中のお爺さんが、腸胃が悪いと云ふことで東京へ出て來て或る醫師の治療を受けた、然る所頗る腸胃が弱つてるに就て、西洋流に極めて消化仕易い、麵麭であるとか、牛乳であるとか、玉子であるとか、云ふ樣なものを與へたので、お爺さん弱つて仕舞つて、一週間ばかりも經つたら聲も出ないやうになつて仕舞つた、そこで、其の話を私が聞いて、それはいけない、山の中の爺さん、食べつけない物を食べたので腸胃が驚いて仕舞つたのだらう、それは大根のおぢやでも食はせたら癒るだらうと冗談を云つた、私は冗談の積りで云ひましたのだが、聞く人は眞面目で、、、おぢやをやつたか何をやつたか、日本流で極く柔らかい物をやつた所が、三日ばかりにしてスツカリ癒つたと云ふ事がある、是は勿論一つの御笑ひ話でありますが、然う云ふ樣な譯でございまして、ナカく西洋の翻譯を持つて來て日本の食物を律すると云ふことは少し考へものと思はれる、と云つて日本の食物を何れだけ研究したかと云ふと、自分には甚だ其の研究は乏しいのである、又第一日本の食物

は醫學上研究をするは甚だ困難を覺える、西洋ではは御承知の通り醫者が大抵其方の興味を持つて居る、醫者が食物の調理法を研究しまして、然うして必要に臨んでは、病人に食物を處方して與へる、然うしますと大抵西洋の食物は其の處方通りに拵へることが出來ます、所が日本の食物はどうもさうはいかない、重なるものは魚である、魚と云ふものは時に依つては獲れたり獲れなかつたりする、例へば鮪の刺身とか、又は鯛でも出來る、鮃でも出來ますが、若し鯛の刺身を拵らへやうと云ふ時に、鯛がなかつたならば矢張其の研究は六ケ敷くなつて來る、と云ふやうな工合で、どうも研究が六ケ敷うございます、

デ私もまだ其の研究が積みませぬが爲に、未だ食物の話として日本流の食物の御話をすることは少し困難てあります、てございますから、今日脂胖病の話と申しましても、別段醫學上脂胖病がどうであるとか斯うであるとが云ふ、六ケ敷い事ではない、唯其の脂胖病と云ふ一つの物を借りて來て、聊か食物の御話をしたいと斯う思ふのでございます、

一般此の脂胖病と申しますと肥るのでございます、身體が一體に肥るのでございます、併し此の肥ると申しましても二樣ございますので、脂肪の澤山沈着するのと、それから本當に筋肉の發育するのと二樣ございます、デ唯一般に肥つて居りさへすれば丈夫だ、強壯だと云ふのは少し違つて居るので、本當の強壯と云ふのは、ムスクレース、筋肉の發育が宜くなるのでなければならぬ、だから古昔スパルタ人が身體を鍛へるには皮膚の表面から筋肉が一本々々分る位に筋肉の發育したのを貴むので、圓々と脂肪の皮下に沈着したのは決して強壯とは云はなかつたのである、

デ脂肪は併しながら一程度までは無論此の健康體に存在するもので、何の位から病氣と云ふものであるか、何の位から健康の部類に屬すかと云ふ事は、是は程度問題であつて甚だ六ケ敷いのである、要するに脂

肨病と云ふものは日本には少ない、脂肨病と云ふ一つの病氣とするやうなものは日本には甚だ少ない、てすから從つて此の脂肨病の研究は甚だ日本では乏しい、西洋へ行きますと隨分此の脂肨病が多くございます、就中獨逸が多い、獨逸へ行つて四十歲から五十歲位の婦人は、モウ殆ど脂肨病と云つても宜い位のもので、非常に肥つた者が多い、電車に腰を掛けると、吾々の三人前も場所を取る樣なのが多い、さうしてヨタ〳〵して居る、それで御承知の通り西洋の家は階段を上らなければなりませぬから此階段を上りますにも、非常な息切をして、階子段を四段五段と來るとモウセイ〳〵息が切れて少し休まなければならぬ、ですから階段の處々に椅子が設けてございます、吾々は隨分時々御氣の毒の思ひをする事があるです、老婦人が先きになつて上て行きますから追ひ越すも失禮と思ひ後からソロ〳〵尾いて行くと、どうも迚も步けない、お前さん先きへ行つて貰れと、階子段て婦人から道を讓られて吾々は先きへ階子段を馳上がる事が往々ある、婦人に殊に多うございます、是は英吉利あたりには餘りないやうですが殊に獨逸に一番多いやうです、

デ一體脂肪は何の役になるか、そんなに餘計に密着いて邪魔になるものならば、平時存在して居る所の脂肪は何の用を爲すかと云ふとナカ〳〵是は大切なものである、容易ならぬ大切なものである、第一は美貌を保つ、人間の身體に脂肪と云ふものがなかつたら非常に見惡いものである、總て表面から圓々と肥つて、然うして美麗に見へる、美貌と云ふものは脂肪の沈着にあるので、ですから一般此の脂肪は男子よりも婦人方に多い、即ち美貌を保つ爲である、吾々のやうな痩ッこけた者は少しも美ではない、決して美ではない、

それから次にどう云ふ用を爲すかと云ふと、啻に美ばかりぢやない、非常に必要の機能を有つて居ります、それは身體の保護器、身躰を保護する、即ち總て此の外部からして害を受け易い所に餘計に此の脂

肪が發育して居りまして、然うして此の脂肪は丁度此の椅子て云ふならば、此のバネみたやうなもので、保護者て即ち痛みを受けないやうに、損傷を受けないやうに保護をして居る、尾籠ながら此のお臀の方であるとか、足の裏の樣な所とか、總て外部から害を餘計に受ける所に餘計にある、或は臟機なども矢張りそう云ふ樣に保護するのです、

第三の役目が備荒貯蓄、即ち身體の性分から云ふと、一番脂肪が下等のものになつて居る、平時は所謂豐作の時には食物が少しでも餘ると直ぐに脂肪に變して身體の中に澤山貯蓄して置いて、凶年になつて食物が來ない樣になるとソロ〳〵脂肪が使はれるのです、丁度備荒貯蓄です、熱病とか或は其他の事で食物を取る事の出來ない時には、一番脂肪が減つて來る、瘠せて來るのは一番脂肪が減つて來る、脂肪が減つて尙ほ足りない時には身體の重要なる所の淡白質が減つて來る、が何にせよ一番早く其の脂肪が減つて來る、ですから此の脂肪は第一に美觀を保つ事、それから臟機を保護する、それから備荒貯蓄此の三種の働きを有つて居る、ナカ〳〵必要なものには相違ないのですね、

デ先刻も御話をした健康と所謂脂胖病と云ふ一つの病氣の境と云ふものが六ケ敷いと云ふことですね、脂胖病の症候として先つ脂胖病を三つに分ける、第一がペナイデテススタジウム、即ち羨望期と云ふ大變強壯らしく見へる、外觀が美であつて、さうして如何にも強壯らしく見へて、人が見ても羨やむやうな外貌を呈する時、之を第一期と稱へます、第二期になりますると、今度は滑稽期と云つて、是は餘り餘計に脂肪がある爲に肥り過るので、脂肪が餘計着いて來ますと、顏から身體の樣子が滑稽に見へるのですね、西洋で芝居などを致しましても、滑稽の人には何時も大きな形をした人が出る、如何にも滑稽なものです、顏はまん丸で、頸と頭との區別がなくなつて、頰の邊かブク〳〵して硬い肉ぢやない、脂肪だけだから軟らかくて下へ垂れて居る樣で頤は

二重になつて眼が細く如何にも滑稽に見へる、是はモウ旣に最も明かな病氣と看做して居るのである、私が伯林に居りまして、丁度學校からして毎日歸つて來る時に、一人の郵便局の役人、どうも素敵に肥つた大きな男、今の滑稽期の男ですな、此んな大きな腹をして（手眞似にて腹の大なる事を示す）ヨタ／＼歩いて來る、實に滑稽である、思ふ樣に歩けない、さう肥つて來ると股が擦れる、足の運びが惡くつて歩けない、兩脚を開て小股に歩きます、其の側へ私の樣な小さいのが後から付いて行くから餘程滑稽である、二ツ列べて見たら尙滑稽だらうと思ふ、自分で考へても可笑く思ふから、他から見たら嘸滑稽だつたらうと思ひます、

それから第三期になりますと、是はベミツトライデテススタジウム、憐愍期と云ふのになる、如何にも憐れを感ずる、同情を寄せられる憐れの狀態になる、此の時期になると大抵モウ六十以上位のお婆さんに多いのである、モウ少し歩いてもセイ／＼息が切れる、それからモウ階子段などは無論上ることは出來ない、少しも身體を動かす事が出來ないと云ふ樣な、非常に肥つて自分で自分の身體を持て餘して居る、是は極く憐れな狀態、斯う云ふ風に三つに分けてあります、

それで第二期第三期、即ち滑稽期や憐愍期は是は無論病的と云ふても宜からう、併ながら羨望期と稱するものは、脂肪病の中に入れて宜いか、健康期と云つて宜いか、之か疑しいのであります、果して羨望期にのみ留まつて居つて、第二期三期の滑稽期憐愍期に移らなければ、立派な强壯體と云ふても差支ない、それが段々進んで來て第二期第三期になつて來れば、是は立派な病氣である、デ斯う云ふ苦境に陷り、餘り肥過ぎて苦しくなると脫脂法と云ふ療法を受ける、即ち脂肪を除く療治をしなければならぬ、けれども一言は註をして置かなければならぬのは、脫脂療法と云ふても、痩せる所の痩削療法――或は饑餓療法――と云ふもの即ち、物を食べずに居て痩

せて仕舞う、斯う云ふ療治がある、是は少し脫脂療法とは違う、同じ樣なものであるけれども少し違う、脫脂療法の方は、餘分に有る所の脂肪を取つて仕舞ふので、瘦削療法は餘分にないものでも取て本當に瘦せて仕舞う、斯う云ふ風になつてあつて少し違う、

デ此の饑餓療法或は瘦削療法と稱するものは、往々西洋あたりで若い婦人が好んで受ける所の療治であつて、時としては危險のある療治である、と云ふのは今の樣に脂肪病と稱する病氣になつてから初めて此の脫脂――脂肪を拔けば宜しいが、普通の健康體の者が、少し瘦ぎすの方が宜いと云ふ妙な間違つた感念からして、若い婦人などが往々にして、此の瘦削療法を受ける事がある、それはいけない、必ずしも瘦ぎすが立派だと云ふ譯にもいかない、けれども瘦せたのが好きだと云ふやうな若い婦人などか、事に依ると外觀の美を保たんが爲めに、健康の身體を脫脂しやうが爲めに、それに心を奪れて健康を害する事がある、又醫者の方も若い經驗のない醫者だと無暗に功を貪る爲めに然う云ふ療治を好んでやる事がある、さうすると時としてはそれが爲に危險を釀すことが往々ある、

それで假に此の脂肪病となりますとですね、脂肪病と云ふ一つの病氣になる時分には、餘り若い人にはなくつて年老つてから多い、それであるからして從つて此の心臟などが大變弱つて居りますので、然うなると脫脂療法は甚だ困難である、又實際脫脂療法は理窟は隨分出來ちや居りますが、實際施して見ると、ナカ〳〵うまくいかない、であるから然う云ふ傾きのある人は、第一に然うなつて仕舞はない內に豫防をすると云ふ一つの必要がある、即ち豫防が一番大切である、即ち今の第一期に留まつて居つて、二期三期の滑稽期や憐愍期に移らないやうに要心をするのが一番必要である、又それが一番六ケ敷いのであつて、是はどう云ふ食物をやつて居れば肥るものであるとか、或は瘦るものであるかと云ふ、一班

の學理を知つて居るのが必要である、それで私は今其事を御話する積りである、

第一に此の身體の素質と云ふものがあつて、兩親か大變肥つて居つて其子供が亦肥つて居る、又は一家の中で兄弟が殘らず肥つて居るとか云ふ素質がある、又遺傳でなくても其人自身の素質に依て大變異つて來る、それであるから同じ食物を食し、同じ生活をして居つても、一方は段々肥るが、一方の方は肥つて來ない、斯う云ふ事が多々ある、だからして學理だけで――理屈だけで、勝手に肥えたり勝手に痩せたりすると云ふことは、此の素質と云ふものがある以上は充分にいかないのです、夫故に此素質のある人は勉めて豫防しなければなりません、デ豫防するにはどうすれば宜いかと云ふと、どうすればそれぢや肥るかと云ふ事を知つて居つたならば、自ら其の豫防が出來る譯でございます、脂肪病を起す原因と云ふものを此所で考へて見ますると、第一に生活の狀態、及び第二に食物が大變に關係を有つて居る、生活の狀態の內で一番影響を持つて居るのは運動です、運動不足と云ふことが一番脂肪の沈着を起す原因である、是は食物とも關係しますが、食物を取りましても、運動が足りないと其の取つた食物が使はれないで餘つて來るです、其の餘つた物は何になるかといふと、此れは何時でも脂肪となつて身體に沈着する、即ち食物を取つたならは、それを消化して皆運動に使つて仕舞へば宜いが、少しでも使ひ殘りがあるとそれが何時でも脂肪となつて身體に沈着する、であるから此の運動と云ふ事が一番必要である、デあるから割合に脂肪病は普通富貴の人に多い、樂をして居る人に多い、運動が足らない、甘い物を澤山食べて運動しない、營養か餘つて始末にいけないで脂肪になる、ですから年齡に關係すると云ふけれども――成程年も關係するし他に關係もありますが、一つは此の運動と云ふ事が大變な關係がある、赤兒が肥ります、赤兒には脂肪のないものはない――營養不良の小兒を除いては――是は何である

かと云ふと、子供と云ふものは自働的に身體を動かさない、始終寐てばかり居る、それだけ使はないから、何になるかと云ふと皆脂肪になつて沈着して來る、老人になつて肥ると云ふ、是も矢張それと同じ事、老人になりますとドン／＼若い者の樣に身體を働らかして仕事をすると云ふ事がない、殊に日本では此の樂隱居をする、樂隱居でもすれば火鉢の側にくッついて御茶でも喫んだりして居る、さうすると榮養が餘つて脂肪になる、だから四十以上になつて社會の戰爭を免れて隱居になつて來ると肥つて來る、無論運動の他にも生殖上の關係なども老人殊に婦人などにはございますが、主として運動の不足と云ふことにあるのでございます、

それから又貧血の人ですね、貧血の人などに大變に脂肪の多い、脂肪病類似の狀態をなすことがある、是なども矢張主として運動の不足に起因する、即ち血液が不足します、さうすると其人は身體を動かす度毎に息が切れるとか、或は苦しいとか、だるいとか云ふ樣な事を覺えます、從つて自然さう云ふ人が床に就くとか、或はヂッとして居るとか云ふ樣な工合にして、運動が不足して來る、だから自然々々に血が不足して居るにも拘らず、脂肪の沈着を來して大變肥つて來る、であるから脂肪病にも二種の區別がある、今の盛なる、所謂立派な血色を持て居る脂肪病と、それから貧血性の脂肪病と云ふ、背膨れに膨れて居る脂肪病、此の二ッに別ける事が出來る、

彼の有名のカルヽス温泉湯へ行くと、此の脱脂療法をやつて居る人が澤山ある、それがどうかと云ふと、盛に運動をする、實に脱脂療法をするには私は大變適當な場所だらうと思ふ、カルヽス温泉場と云ふ所は詰らない所でございますが設備が行屆いて居ります、唯一つ谷がありまして――川がありまして、其の兩側にズーッと山がある、さうして方々に温泉が沸出る、デ其の川の兩岸の山に殘らず立派に道を附けて仕舞つた、縱横無盡に道を付けて仕舞つて、グル／＼廻ることの出來るやうにしてある、實に心持

好く散歩の出來る樣になつて居る、でありますからして此の脂肨病の人は然う云ふ所へ行つて、極く柔らかい下劑を飲んで、カルヽス泉は輕い下劑でありますから、之を飲んで、さうして始終山の中を散歩して歩くナカ〳〵、設備が能く出來て居る、大變効能があるさうである、

次に精神的の關係です、此の精神を使うと云ふ事は何程營養分を消耗するか分らない、身體的運働よりも尚ほ一層精神的運動が、身體に大切なる所の營養物を消耗するのである、であるからして此の精神の過敏な人、所謂癇癪持と云ふ樣な人に餘り肥つて居る人はありませぬ、それは餘り營養を使ひ過るからして、殆と脂肪の沈着を來せる餘地がない、どうかと云ふと此の餘裕てす、人間少し平日餘裕があれば宜いので、餘裕がないと肥ることが出來ない、充分にユッタリとして餘り精神をコセ〳〵使はないで、精神が過敏てないと云ふ事が必要である、デ從つて若し餘り肥る時は精神的の仕事をする必要がある、餘り暢氣にブラリとして居ると矢張脂肪の沈着を來す基になる、即ち身體的並びに精神的の運動が極めて必要である、

○それから眠ると云ふ事などは最も注意しなければならぬ、餘り長い時間の間眠つて居ると云ふ事はいかない、即ち眠ると云ふ事はどうであるかと云ふと、精神的並に身體的の運動兩方共に休ませる、休止して居る時期であるですな、ですから餘り眠ると肥るですな、餘り寐坊などはしない方が宜しい（笑聲起る）、詰り一口に云へば働きですな、働くと云ふ事が必要である、生活の狀態から云ひますとつまり飽食暖衣逸居して眠を貪るといふ事が脂肨病の大原因でござります、

○それから食物であります、食物は最も此の脂肨病に對して大なる關係を持つて居るものである、第一に食物の量餘り多量に食すると云ふことは宜くないのである、吾々が自分の生活を維持して行くに就ては、毎日使うだけの物を食物として受取れば宜しい、夫

れ以上に餘計に受取つたものは、皆脂肪となつて身體の成分の内の一番下層の脂肪となつて沈着する、デさうすると斯う云ふ不審が起つて來る、そんなに自分で使ふより以上の物を消化して、それを同化する事が出來るか、云ふと是は出來るのです、殆ど吾々が平日自分の身體で使ふよりは二倍の物を消化し、併せてそれを同化する事の出來る機能を有つて居るのである、であるからして食物を自分で使ふより以上受取つても、矢張それは消化して行きます、消化しなくつて出て仕舞へば宜いけれども、矢張消化するです、消化してそれを使はないから仕方がない、脂肪となつて沈着する、斯う云ふ譯になる、デ例へば此の病後などに肥るのがある、長い熱病などをやりますと、其の後へもつて行つて肥るのが通例であります、是は食物が餘計に入るからですね、であるからして餘り多量の食物を取ると云ふことは脂肪病の爲めに宜しくなゐのです、

第二が食物の種類○○、種類は餘程注意しなければならぬ、是が一番必要である、デ種類は何かと云ひますと、吾々の平生取る所の食物は大要蛋白質、脂肪、含水炭素、此の三つに區別する事が出來る、尙此の三つを引包めて云ひますと二つになります、含窒素物、無窒素物の二つに分けることが出來る、蛋白質は窒素を含んで居るから含窒素物、脂肪と含水炭素は是は炭素を含んで居て窒質の無いもの、之を無窒素と稱へます、含窒物と無窒物と此の二つを適度の配合にやつて吾々はいかなければならぬ、デ脂肪と含水炭素は同じ無窒物の仲間であるから相互に相代用する事が出來る、含水炭素は脂肪の代りをすることが出來て、脂肪は含水炭素の代用をする事が出來るが、脂肪が蛋白物の代用をすると云ふことは出來ない、ツマリ含窒物と無窒物の二つに分けることが出來る、であるからして此の三種類若くは二種類の内何れを餘計に食べれば脂肪が餘計出來て來るかと云ひますと蛋白物も餘り餘計に取ると其餘分は矢張脂肪に變化する、即ち體の中で脂肪に變じて來る、

斯う云ふ說もあります、けれども是は餘りハツキリした說ではない、蛋白は脂肪に變化しないかも知れないけれども、含水炭素と云ふものは是は直きに脂肪に變化して仕舞う、であるからして含水炭素を餘計に食べると、脂肪を餘計に食べないでも矢張脂肪が澤山出來る、含水炭素から矢張脂肪が澤山出來て來る、斯う云ふて見ればもう脂肪沈着の理由は明瞭な話である、

それではどうすれば脂肪がなくなるか、云ふと蛋白質の物を餘計に食べて脂肪と含水炭素を食べないやうにすれば宜い、極く輙い話である、蛋白質は何てあるか、肉類であるとか、總て動物性の物が蛋白質ですな、是は割合に餘計に食べても脂肪には關係しない、脂肪の方はどうであるか、云ふと是は脂肪を食べても脂肪自己が沈着すると云ふことは寧ろ少ない、却つて含水炭素か脂肪に變して沈着するのが多いのみならず、日本に於ては脂肪は食物の中に少ない、西洋人ほど餘計に脂肪がない、それてあるから脂肪は餘り控へるには及ばない、稀には日本人にも非常に執拗い脂ッこいものを好む者もありますが、通例日本の食物には脂肪が少ない、之に反して含水炭素は日本の食物には非常に多い、非常に多くあつて是が大變脂肪を作る基になります、含水炭素と云ふものはどんな物だと云ふと、大抵植物性の物、澱粉質の物、砂糖類、それてあるから日本人の常食たる米の飯、此の飯などは麵麭と大した差はない、均しく含水炭素てあるけれども分量が多い、一體此の脫脂療法をやる時分は、無論麵麭などは禁じてある、まるで食べさせないのぢやないけれども極少量を與へる、實際西洋の人は麵麭は餘り餘計には食べないです、日本人の樣に澤山食べない、西洋人は食べても小さい麵麭の一片位ですが、日本人は米の飯を澤山食へなれて居るからどうしても余計に食べる、是は麵麭も米の飯も同じ事てありますから、矢張含水炭素を澤山含んて居る、之を餘り多量に食べると大變脂肪が增して來る、

テ野菜類てさね、野菜類の中ては菜てあるとか、大根てあるとか云ふやうなものは、是は割合に水分ばかり多くつて本當の含水炭素は少ない、一番禁ずべきものは芋てございます、芋は絶對的いけない、西洋ても此の馬鈴薯はモウ脂肪の多い人には絶對的禁じてある、又芋を食べれば肥ると云ふことは民間ても一般に知つて居る、デ私共は能く笑はれた、どうも餘り芋は好きぢやないものだから芋を食いない、お前さんは芋を食べないから肥らないと、あちらの人に笑はれたことがある、隨分萬國、殊に獨逸は芋を食うてす、實際は獨逸の馬鈴薯は非常に甘い、少し下層の者になつて來ると、殆と馬鈴薯は常食になつて居る、尚ほ餘計に肥る人間が出來て來る、日本ては薩摩芋、是れは馬鈴薯よりは尚ほ一層含水炭素が多いてすね、含水炭素は非常に多い、尚いけない、それから里芋、總て芋類はいけないてすね、絶對的禁する方が宜い、それから砂糖類てすね、菓子類、てすから此の菓子類はナカ〱脂肪の沈着を來すので、脂肪病を起す原因になる、日本て肥つて居る人は大抵マア菓子の好きな人てすね、アルコールよりも却つて菓子を好きな人が多く肥つて居るかと思ひます、菓子は餘程節減しなければいけないのですね、一々其の品物を擧げてお話するほどの事もないてすが、斯く云ふ風の工合に、一番注意して節減すべきものは含水炭素であります、

今申しました樣に無窒物の中殊に此の含水炭素の多い澱粉類、砂糖類を一番少なくしなければならぬ、何れ位それならば食べれば宜いか、と云ふ割合です、其の割合はどうも人に依つて違うてございませうし一樣には云はれないが、各體に就ては今御話した樣な次第であるから自ら分る、通常の人は大抵此の蛋白質百二十瓦、それから脂肪五十瓦、含水炭素五百瓦、是が普通の食物としてある、であるから是より此の含水炭素の量と脂肪の量を減して行くのですね、若しも脂肪病になる虞があるとか、或は自分の兩親が非常に肥つて居て自分も總う云ふ素質があり

はしないか、遺傳がありやしないかと云ふ人は、豫め斯う云ふ注意をしなければならぬ、何れ位までに減せば宜いかと云ふと、是はエルテルと云ふ人が試驗して脱脂療法として一つの療法を拵へたのであるが、此の人の說に依ると、大抵蛋白質が百六十瓦、脂肪四十瓦、含水炭素百瓦、斯う云ふ風にしてあります、即ち含水炭素が非常に減つて居るですね、普通は五百瓦から四百瓦だが是は其の五分の一で、脂肪も少し減つて居る、其代り蛋白質でズッと多くなつて居る、此の位にして行きますと大抵脂肪の沈着を受けないのである、

デ本當に脱脂療法を始めるには初め身體の量目を量つて、さうして食物を色々取替へてさうして一週間なり二週間なりでもつて、自分の體內で使うだけの分量をどの位使うと云ふ事を見なければならぬ、さうして毎日食べたゞけの食物の量を量つて、毎日體重を量つて、體量が減りもしなければ增しもしないといふ時が其の人に適當の分量の食物である、其の中から含水炭素であるとか、脂肪であるとか云ふものを減して行く、さうすると體量が減つて行く、是は脱脂療法としての方法であつて、各人皆違つて居りますから一樣には云はれませぬが、大抵割合と云ふものは其の位で宜しい、

それから尙ほ附加へて此のアルコール飮料、アルコール飮料は是は大變に脂肪の沈着を助けるので、だからして肥つて居る人を見ると酒客だと云ふ、直ぐに彼れは酒を飮むだらうと云ふ、確かにアルコールは脂肪の沈着を助けますけれども、どうも酒ばかりぢやない、菓子を食う人、下戶の方の人も矢張肥つて居る、必らずアルコールばかりとは云へない、けれども一般にアルコールと云ふものは一つの燃料物でありますからして、脂肪が燃へる前に早くアルコールが燃えて仕舞う、さうして吾々の體溫を拵へるからどうしても脂肪が餘つて來る、即ち脂肪よりアルコールが先きに燃えて仕舞つて脂肪の代用をする、であるからして脂肪が直ぐに沈着して來る、だ

からアルコールは堅く禁ずる方が宜い、併し極く輕い葡萄酒を薄くして用ゆるのは宜いとしてある、私の考ではビールが一番いけないと思ふ、ビールを飲んで肥ると云ふ事は一般の人も云ふ所である、又實際獨逸へ行つて肥つて居る人の多いのを見ても、大變ビールに關係しやしないかと思ふ、無論其の國の人間の性質にも關係する事が多いでございませうが、御承知の通り獨逸はビール國であつて、ビールを大變飲む、あれが脂肪病の原因になりやしないかと思ふ、殊に然う思はれるのは獨逸の中でも、ミユンヘンへ行くと一番肥つて居る人が多い、有名のビールの本場で、全市殘らずビール屋と云つても宜い位てある、如何な人間でも毎日ビールを飲む、だからホーフブラウエライと云ふ醸造場へ行くと肥つた、ビール樽を轉がしたやうな人間が非常に澤山居る、驚ろくべく肥つて居る人が居る、斯う云ふ事は他國には見えない、他國と云ひましても私は極く見聞が狹うございますが、英吉利へ行つても此の獨逸の如くビール樽風の人は先づ見へない、私は伯林から倫敦へ來た時に、どうも人間の恰好の違うのには餘程奇態な感情を持ちました、英吉利人は御存じの通り丈の高い人間でございます、獨逸の人間は肥つて居て、丈競べ横から來たら仕けないと云ふ風である、第一可笑いのは巡査で、巡査を對照すると、伯林の巡査は馬鹿に肥つた恰服の立派な巡査が立つて居る、殊にこんな風のものを撰擇するのです、倫敦へ來て見ると馬鹿に丈の高い巡査が立つて居る奇觀ですな、兩方列べて見たら餘程面白いだらうと思ふ、英吉利の巡査は往來に立つて居ても大抵な人より頭だけ高いから、何所へ行つても彼所に巡査が居ると云ふ事が分る、他國には然う云ふ丈の高いのはない、又獨逸ほど横に肥つた人間の多い所はない、就中此のビールの本場である、ミユンヘンに肥つた人の多い所を見ても、アルコール飲料が脂肪の沈着を來す中にも最もビールは烈しいものではないかと思はれる、

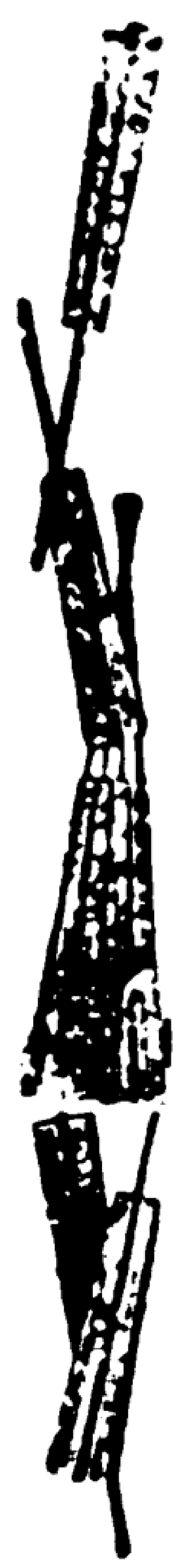
それから次には流動體、是は餘り餘計に水を飲むとか、或は他の流動體を飲むと云ふことは、是も脂肪の沈着を來す原因であつて、是も減じなければならぬ、成たけ咽喉の干くのを我慢して、さうして飲料を取らない樣にしなければならぬ、是を以てしても矢張ビールが關係しやしないかと思ふ、他の酒はビールの如くガブ〳〵餘計には飲まない、だからしてビールはアルコール飲料よりも、餘計に此の液體を取るから是が矢張一つは關係しやしないかと思ふ、それで成たけ水を飲まないやうに、殊に御飯を食べながら水を飲む、水でも茶でも飲料を飲むと云ふ事は成たけ禁ずる方が宜い、若し飲むならば御飯を食べて仕舞つてから、一時間か一時間半も經つて、それから初めて飲むと云ふことにして、食事中に水を飲まない、又食事前、食事後に於てのみならず、全體に於て流動體を餘り餘計に飲まない方が宜い、本當の脱脂療法をやる事になると、殆と水は飲ませない、

それから其の他尚新陳代謝の機能を盛にしなければならぬ、物質の變換を盛にしなければならぬ、それには皮膚の機能を盛にしなければならぬ、皮膚の機能を盛にするとにはどう云ふ風の事が宜いか、皮膚を清潔に保つこと、それからして殊に賞揚すべきことは、冷水浴を奬勵して居りますが、日本人には餘り此の冷水浴と云ふ事は適當するかしないか、不或る場合には冷水浴が出來ない事があるが、冷水摩擦が一番宜い、朝起きたなら冷たい水で、其房を閉めて置いて、室の中を少し溫めて置いて、其所で冷水で手拭を絞つて、グン〳〵少し赤味の出るまで擦る、さうして着物を着るとポカと身體が溫かくなつて來る、即ち皮膚の機能を旺盛ならしむる手當として大變賞揚すべきことである、

それから同じく新陳代謝、機能を盛ならしめるには、便通の狀態を注意しなければならぬ、であるからして此の果物などは極く輕く便通を促すものである、殊に酸味のある果物、林檎であるとか、蜜柑である

とか云ふ樣な物が宜い、其他炭酸鹽類、炭酸鹽類などは餘り多量にやつてはいけないけれども、極く輕い便通を促すが爲には必要である、だからカルルス泉などは大變宜いです、其他日本にあるアルカリー泉、炭酸性のアルカリー泉などは少し用ゐた方が宜しい、

斯う云ふ風にして、平日に生活の狀態、或は食物の狀態に注意して居ると云ふと、年を老つて餘り憐愍期に陷る脂肪病に罹る事はない、殊に然う云ふ素質を有つて居る疑のある人は、此の生活の狀態並に食物の狀態を注意しなければならぬと思ふ、甚だ詰らない事を申上げて、長くなりましては却つて御迷惑を醸す樣な譯ですから、是で御免を蒙ります、





●母乳と分泌　（前より續く）

醫學博士　瀨川昌耆君講話

▲出過ぎるは病的　乳汁が哺乳兒に飲み切れず、例日も餘り過ぎて母親の襦袢や着物を透してジミ〳〵濡れる場合もあるし、又斯ういふ母親が隨分多く世間に見受けますする幾ら母乳は澤山なのが良いと云つても餘り出過ぎるのは宜しくありません、詰り之れは一種の病氣であります、デ斯ういふ餘分に出過ぎる場合には何うしたのが宜からうかと云ふに食物を扣へ目にする事が尤も善良なる手段で此方法が素人に出來易い安全なる良策です、乳汁の出過ぎる母親は斯してお試しなさいケレど極端に食物を控へ目にして身體の健康を害すやうな拙劣な方法を取つては

なりません、

▲乳汁を出す手段　夫れから母親が身體健康で居乍ら乳汁の分泌が非常に惡い事がある、是れは全たく乳腺の發育が不完全である爲めだが、斯ういふ狀態であつても決して落膽し「モー迚も乳汁は出ない、不足だから仕方がない」と斷念することは非常なる不利益なことであるのみか、餘りと云へば無責任な譯であります斯く失望するよりは先づ哺乳兒にセッセと吸はする事を工夫なさい、乳汁は吸はせれば吸はせる丈乳腺の機關が微妙の功を奏し是れ迄不完全で活動せずに居た部分が段々活動して來るものです附うして乳汁の分泌量が殖えて來て哺乳兒一人には充分飲ませられる丈になつて來る、何んでも根氣克く丹精して吸はせねば宜けません、吸せるのは即ち乳腺に刺戟を與へるからであります

▲賣藥及精神の感動　賣藥などに『乳汁の出る妙藥』などとれい〳〵しい招牌を出してある、是は西洋などにも斯んな賣藥は見受るが直接に乳汁の分泌を多く殖すと云ふ妙藥は古來無いので、文明の醫學上にもまだ此發明をして奏功したのは一つもない、夫れ故斯んな曖昧な賣藥などに瞞かされず前にお咄し致した通り食物の上に力を注ぐ事が何より肝腎であります尙玆に御注意して置きたいのは假に精神の感動を與へる場合、即ち非常に驚くとか、非常に悲しむとかの場合には乳汁分泌の上に關係するから、此の時は絞つて捨て哺乳兒に飲ましては良くないと云ふが、是れも誠に不確な說で、是れ丈の結果が顯はれたと云ふ確然たる證據は顯し得ないのです、詰り是れは唯一片の理屈に止まるもので、乳汁の成分が變化し假に惡くなる事はないのです、併し餘り永い時日悲泣交々至るやうな所謂苦勞が續く場合には乳汁の細る事があるのです

●乳を飲ませて惡い病氣

▲母乳の鑑定　善良なる母乳か、又不良なる母乳か夫れを簡便に素人の方の鑑定出來る事は極く必要な事です、其の心得は詰り哺乳兒に母乳を飲まして害

が無ければ宜い、乳母を吐きもせず、夫れが飲んだ爲め下痢もせず、哺乳兒が健全に肥滿して往けば、異狀のない結構な母乳と申さねばなりません

▲飲ませて差支ない病氣　次に母親の乳汁を飲まして惡い事即ち廢乳としなければならぬ場合がある、夫れも保育上大切な事なれば能く記臆致されるやうに願ひたい、元來母親の病氣のときは乳汁を吸はせる事は宜しくないけれど、病氣と云つても種々あつて、急性あれば慢性もある、惡性もあるが、何んでも病氣と名の付く場合は絕對的哺乳して惡いかと云に決して爾う斗りは云へない、一時急性に來た病氣なら少し位發熱があつても飲まして差支へないのです、例へば人の多く冒され易い感冒とか腸胃加多兒の如き病氣に罹り急に熱の起る事があるけれど、心配せずに飲ませるが宜い、ソコデ万一其の母乳が惡く、哺乳兒の害になる質があれば、直ぐに夫れを吐いて收まらないのです、斯る事實が顯はれたら直ぐに廢めてお仕舞ひなさい

▲惡性病の場合　急病なら兎に角、重い病氣で永く全快せぬとあれば之れは絕對に廢乳せねばならぬ、假ば慢性の結核、癌種、梅毒、斯くの如き惡性の病に冒された場合は申す迄もなく哺乳してはならぬのです

▲乳房の病氣　身體は健康でも大切なる乳房に故障あらば之れも廢めなければならぬ、乳房の病氣と云へば先づ、腫れを起すとか、凝が出來るとか、乳首の裂痕と云つて乳首に裂けるやうな瘡が出來非常に痛みを感ずるものです、此裂痕は哺乳兒に吸はせてる間は到底治癒りません、殊に痕からは出血したり、膿を泄したりするので斯んな有害物が乳汁へ交つたら哺乳兒は何んな害を受けるかも知れない、且つ母親も裂痕のあるにも係らず吸はして居て何時の間にか其痕から恐るべき黴菌でも喰入られたら飛んだ危險を釀します、ケレど吸はせなければ必らず乳房が張て來るから之は必ず絞り捨て仕舞ふ事てす

●恐るべき哺乳兒脚氣

▲脚氣の毒　母親が脚氣に懸つたとき又は脚氣の徴候あるときは斷然廢乳しなければならぬ、是迄廢乳すべき病氣に就きお咄し致した中で何の病氣よりも一番哺乳兒に危險を迫ぼし、生命に關係するのは此の脚氣で御座います、哺乳兒時代でも分けて幼稚な時代ほど脚氣の毒に犯され易いので、隨分是が爲め斃れる哺乳兒は澤山あるが、就中今年は哺乳兒脚氣が多いのです、デ母親は極く輕症な脚氣で、足か少し倦勞とか、少し麻痺とか位で、果して脚氣になつて居るのか何うか自分にも左程心付かんで立働いて居るが、斯ういふ場合に其の兒には早くも母親の脚氣の毒が感染して恐ろしき哺乳兒脚氣を起して居ます、不注意な母親は夫れとも知らずに、ナゼ機嫌が惡いのだらう位に思つて居ると取返の付かぬ急變を來すのです

▲手後の例　哺乳兒脚氣にかゝつたとも知らず母親は、『何うも二三日機嫌が惡いから醫師に診て貰はう』と哺乳兒を連れ出した其途中で遂に斃れて仕舞つたりするし又病院へ連れて往つて診察を待つて居る間に急變が來て、手當をしてもモハヤ醫師の力で生命を繫ぎとめる事の出來ぬやうな事がある、母親は左程哺乳兒が重症に陷つてるとは知らぬから今更の如く周章狼狽するがモー追付きません、ナゼならば哺乳兒脚氣が心臟痲痺を起して斃れるのだから、手後れになつては先づ恢復の見込みなき故母親が脚氣と心付たら直に母乳を與へる事を廢め、哺乳兒は醫師の診斷を仰ぐが宜い

▲哺乳兒脚氣の徴候　哺乳兒脚氣の徴候を序に說明して置から、先づ哺乳兒が此病氣にかゝると元氣が失せて、無欲の性態即ちボンヤリして生氣がなく眼もドンヨリ仕て仕舞ひます、夫れから顏の色も惡くなり、泣聲も涸れてヒー／＼泣き、乳汁を吐き出し大便は綠色になり、小便の通利は惡くなる、夫れ斗りではなく上瞼は半ば垂れて半開になし、何を飮ませても咽せて充分に飮み得ないのです、斯る病狀を少しても發見したら手後れにならぬやう、敏活に

手當をする事が必要です、時日を經ると衰弱を來し、乳母を廢めたところで迚も恢復は覺束ない程の危險を釀すのです、恐るべき哺乳兒脚氣は母親の脚氣の毒に冒されるので、母親が脚氣の徵候あらば直に廢乳することを記憶致すやうに願ひたい

●母乳の檢査

▲大間違ひな說　素人の方に判る母乳の鑑定法は前に述べた通り、良質の母乳か、不良質は母乳かは之によつて御判斷が附ませう、ケレども世間では乳房の形狀によつて不適當の乳汁だと速斷したり、或は乳房の形狀も惡るし、分泌も不充分だからと云つて廢乳にしたりするが、是れは大間違ひな說で決して廢乳の原因となりません、乳房の形は、少さからうが、大き過ぎやうが、平つたい胸へ押付けられたやうな乳房であらうが、夫れを以て廢乳と臆斷するのは此上もなき誤解である、斯んな間違つた考へを信じて居るのは未だ世間に多いやうだがドン〳〵哺乳兒に吸はせる工夫をなさい、爾うすれば前にも云つた通り一種の刺戟で乳房の形狀も追々と直つて、外に故障さへなくば廢乳どころか良い乳汁が出るやうになります

▲母乳細密の檢査法無し　母乳の良否を檢査する事に就いて、往々醫師に依賴する母親がある「如何でせう、母乳の性質は善いでせうか、又は惡るでせうか、一寸御檢査を願ひたい」と云つて來るが、之れは前に申した鑑定法以外に別に大差を生ずる檢査法は無いのです、詰まり母乳に大なる變化のあるならば、顯微鏡檢査法及び化學的檢査法でも判るが、細密なる事は一寸見た位で到底檢査し得ることは今日の醫學上ではまだ出來ないのです、然るに醫師によると「宜しい、檢査して上げやう」抔と如何にも手輕く檢査して、善いとか惡いとか判斷するが、是れは却つて醫師の不親切と云ふより外は無いのです、ナゼならば細密なる性成は爾う一寸檢査して判るものではないからです、手近いお咄しが先づ一日の內でも朝と夕とは旣に性分の異つて居るやうな譯です

もの、一寸位の檢査で確然と母乳の善惡を判斷が出來ませうか、斯ういふ醫者があつたら却つて其の說の不確なることを標榜するやうなものです

▲安全なる鑑定　夫れ故母親の身體が健康で、乳汁も善く出て、哺乳兒の身體に異狀なく完然の發育を遂げれば、夫れが申分のない乳汁です、即ち前に述べた通りの母乳の鑑定法で安全に良否を定める事が出來ます

▲檢査の出來る範圍　去れども母乳に大なる變化があつて異性分や、黴菌や膿球抔の含まれて居るのなら顯微鏡檢査で直ちに夫れを發見することも出來るし、夫れから又脂肪（即ち乳球）が充分か不充分か位の事は化學的檢査で見分ける事が出來る、併し斯んな大なる變化のある母乳なら直ぐ哺乳兒に其の症狀を顯はすから、母親の注意によつて母乳の良否を發見する事が出來るのです

●神經衰弱防豫法

狩野病院長　狩野謙吾氏說

前略神經衰弱患者の精神的苦痛を擧げて見れば大略左の三つの病狀になつて現れる即ち

一、過度の心配及病的感覺　二、不安、不愉快　三、知意減少

作業力消失と云ふように此病狀の順を追ふて說明しましやう

▲過度の心配及び病的感覺　今茲に神經過敏の人がありましたならば皆さんは其人のとを神經質だと申しましやう扨て其神經質とはどの樣な狀態を申しますかと云ふに（甲）何か悲しい話や悲しい詩歌などを聽くと直に哀れを催すとか（乙）餘處へ行つて極叮嚀な待遇を受けても若し其中何か一つ氣に喰はぬ事があると直に冷遇されたものと惡く取つて不愉快に思つたりするの類を申しますので早く言ふと物事を度を過して氣にするのを申すのであります、以上の樣に神經質な人の神經作用は一方には多感狀態

(即ち甲)となつて現はれ一方には誤感狀態(即ち乙)となつて現はれ多感には涕泣、悲憤、同情を伴ひますし誤感には嫉妬、猜忌、怨恨を伴ひます、或る程度迄は神經質の神經過敏も神經衰弱病の爲めになつた神經過敏でも同じ樣に見えますけれども或る程度以上は大に違ひます。

神經衰弱病の爲めに神經が過敏になつたのはどの樣な狀態になつて現はれるかと云ふに些細な事柄でも左も重大な事柄の樣に感じ夫れから夫れと種々な想像を描いて無闇に心配の種を蒔き若し父母兄弟などに卒中にて倒れたものがあればそれが心の外傷となつて自分も卒中になりはせまいか必ずなるだらうと無用な心配を起し毎日さうやつて居ると早何時の間にか頭痛がする耳が鳴ると云ふ始末になりそれが半年も一年も消せないで遂には食物にも運動にも過ぎる程氣を付けて年が年中自らが其病氣になるだらうと感じて居る病氣の心配で持切つて居る即ち心臓病になりはせぬかと感じて居る人は心臓痲痺を心配するし、肺病になりはせぬかと感じて居る人は咯血を心配するし生殖器障害になりはせぬかと心配して居る人は結婚の事や子孫の事に就て始終其心配が止まずに取越苦勞をして居ります、之を病的感覺と申します、是が第一の病狀であります。

▲不安、不愉快　昔支那の杞の國に天が崩れ落ちて身を寄せる所がないのを憂ふるの餘り寢食を廢した者があつたのでそれから物を餘りに心配することを杞憂と云ふ樣になつたのださうでありますが神經衰弱した人は此杞の國の人の樣に無用な心配をするのが持前で誠に以て御氣の毒でなりませんので御座います、昔は堅氣の内儀さんで今は婆アさんになつて居る人などに此杞の國の人の樣な神經衰弱者がなかなか多い、嫁入以來四十年も五十年も無い足りないの心配や難儀はびくともせず何から何迄氣を配つた揚句の今は左團扇の何十萬圓と云ふ財産が朝から晩迄心配で寢る時になると戸締りがどうだらうとか湯殿の火がすつかり消えたらうかとか一度改めても

心配、二度改めても心配、三度も四度も改めると云ふ始末、斯様な御老人は生活が豊かで何も不自由はないのに斯も心配の止む時のないのは誠に可哀相なもので之を名譽の神經衰弱とでも申して置きましやう、其外神經衰弱者には皆それ〴〵の不安があります、獨逸の有名なゲーテは人の心程解らぬものはよもあらじ滿足なき世を滿足を求めて苦勞すると云つたが是は普通の人の事で神經衰弱者は一種其苦勞が違ひます、さうして其苦勞の爲心は何時でも悶躁、惑々して苦しんで居るから安心と云ふものがどうしても得られない、從つて不愉快でたまらない、是が第二の病狀であります。

●知覺減力、作業力消失　神經衰弱患者は又知意減少して作業力即ち仕事をする力が自然に衰へて參ります、例へば書物を讀むと僅か二三枚にして頭が重くなつて來て意味が解らない、それを記憶して覺えて置く事は猶更出來ない、今度は筆を執る、すると直に厭きて肩が凝つて來る、それてあるから一寸した用辨の手紙を認めるのでも其苦しさは大文章家が一代の名文を作るにも劣らぬ程であつて僅かの計算は又大藏大臣が財政計畫を立てる様な大問題の氣がする、其から次に談話はどうであるかと云ふに矢張其通りで用のある話しでも二三十分も過ると否になつて仕舞ふ、斯様な工合でありますから凡て物事が否になる、顏色が其時々に變る、是ではとても商賣の懸引などは思ひも寄らないし、又人と滿足な交際はとても覺束ない、それでありますから人から信用を得る事は出來ないし永い中には家族にさへ厭られて仕舞ます、一體神經衰弱の一番の微候とも云ふべきものは其人の感覺に障りが起つて居る事で御座います、感覺に障りが起つて居りまするとその人は始終病的感覺（病的感覺とはどう云ふものだと云ふ事は前回に申上て置ました）に苦しめらるゝこと恰度借金をしたものが始終其借金に苦しめられて居る様なもので御座います、早く言つて見ると何の事はない神經衰弱と云ふ借金の爲に感覺と云ふ財産が不

足になつて夫て苦しんで居るのであります、借金を返濟しての上に一辛棒しなければ元の通りの財産になりません、夫れと同じ事で感覺の障りを取てしまはねば元の通りの健全な感覺にはなりません、其障りのある感覺で仕事をしやうと云ふのですから神經衰弱者のする仕事は滿足にいかないのです、即ち一歩進めば一歩退き病勢によつては二歩も三歩も退き何時迄たつても知覺が元の通りにはなりません、神經衰弱患者は知覺が減少して作業力が消失するとは此事を云ふので御座います、最も知覺減少が甚だしくなると遂職業を失ふ樣になります、是が第三の病狀であります。

神經衰弱患者の精神的の苦痛は荒增、以上申上ました三つで御座います、此外に肉體的の苦痛即ち病狀が澤山ありますが今其三四を數へて見ますると先づ第一が頭痛、第二が頭重、第三が不眠症、第四が動悸、それから手の掌から汗が出るとか手足が冷るとか左もなくば顫へるとか云ふの類は皆肉體的苦痛て御座います、以上の病狀には食慾減少、便秘などが御先觸になつたり御供になつたり致します、或は又生殖器障害と云ふ附物があるのもありますが是は等閑にはされない大事な問題であります（是は追〳〵に精しく御話し致します。）

●五箇條の豫防法　以上御話した外にも病狀を並べ立てたら幾干も面白い事や奇妙な事がありますけれども餘り長く病狀の事を御話するのは左迄益がない許りでなく神經過敏な人には反て害があります、それは恰度火が今燃えやうとして居るところへ一陣の風を送る樣なもので慎まねばならぬ事で御座います、一體病氣に關係した話しや書物を好んで聞いたり讀んだりするのは身體の弱い人や神經過敏な人若くは病人に多いもので中には醫書を繙いて自分の病氣は何であるかと詮索したり新聞雜誌を見ては賣藥の廣告や家傳傳授を調べたりして今迄は何でもないのに少し身體がどうかするとヤレ病氣が來たと自分で求めて病氣を拵へる樣な事が少くないそれで

ありますから豫防、攝生の事は精しく御話しすればする程益があるけれども病狀の講釋は大概にしないと却つて害を與へまするから先づ此邊で止めにして置きまして愈豫防法の御話に移ると致しませう一體此神經衰弱の豫防法と申しましても一般の傳染病の樣に離隔消毒と云ふ樣な或定つた方法とては御座いません、然らば其豫防法と申しますのは何であるかと云ふに別に六ケしい事も何もない個人衛生即ち皆さんが御自分銘々に十分衛生に御注意なさるのが何より優した豫防法なので御座います、今其神經衰弱豫防の個人衛生の大項目を擧げると五箇條あります、即ち

(一)精神の勞役には規律と順序とを要す
(二)常に精神の休息慰安を怠るべからず
(三)身體の營養を怠らざる樣注意すべし
(四)稟賦の改善を計る事を忘るべからず
(五)其性質に適當せる職業を選定すべし

以上の五箇條は大項目で御座いますから是から又色々な細い項目が分れて參ります。

●精神の勞役には規律と順序とを要す

▲精神勞役と力役　精神勞役即ち精神を使ふと云ふ事は外から見ては知れないもので御座います、皆さん御存じの通り百人一首に「我そではしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし」と云ふ歌があります、其歌の意は我袖は汐汗にも見えない沖の石の如く人はキット知るまいがマア涙でかわくひまもないと云ふので御座いますが誠に此歌の通りで精神勞役は親子の間でも夫婦の間でも容易に知れないもので力役即ち俗に云ふ力業の樣にはつきりと見えない、其上此精神即ち腦の力と申すものは其人次第で强いのもあれば弱いのもありまして其度合に著しく違が御座いますことは筋力の違ひなどの比で御座いません、それでありますから精神の力の强い人と弱い人に同じ仕事を同じ時間の內にやらせるのは恰度小供と大人と角力とる樣なもので無理な事で御座います、神經衰弱の問題はかう云ふ所からも

湧て來るもので御座いますから世の子女を敎育なさる父兄方や敎育家は篤と此の邊に御注意を願ひたいもので御座います。

●流行性黄疸

某國手談

本症は既に十八世紀の初めより人の知る所なるも千八百七十九年フレーリヒ氏其詳報を公けにするに至り始めて佛獨諸家の報告亦多きを加へ千八百九十年ヘンニッヒ氏は大小八十六回の流行性黄疸をリテラツールより集收せしが內八回は頗る廣區域の流行なりしも他は一家族、兵營、監獄、寄宿舍、癲狂院內等一部に限局し年々多少の流行をなし殊に冬夏の候最も盛んなるを言へり元來流行性黄疸は經過及び症狀により輕症即ち單純性及び重症或は傳染性黄疸即ちワイル氏病の二種に區別せられ其輕症のものは皮膚、粘膜の黄變を除くの外他に顯著なる症狀を發せざるもワイル氏病となり惡寒、戰慄、高度の發熱、頭痛、眩暈、倦怠、譫語、脾及び肝の肥大、蛋白尿及び諸種の圓柱を排出するものは往々死に轉歸すると少なからず而して之が原因に就きては諸家說を異にし或は之を飮食物の異常と云ひ風土飮料水の如何に歸し又一所に限局せる毒素によるとなす等必ずしも一定せざれども現下市內に流行のものは散在性にして飮食物に因するとせば一區或は二三區を離れて例へば神田區と麻布區に時を同ふして發病ある謂れなく又空氣、氣候、土地、水の如何にありとせんか同じ東京市內に於て斯く空氣、氣候の差異ある筈なく萬一之ありとせば病勢は尙ほ廣域に蔓延し決して一家族或は一合同に限らざるべし水に對する疑問の如きは水道布設の今日敢て之を云々するの要なからん然らば則ち第三の一所に限られたる毒素に因するの說最も有力なるや言を待たず何となれば患者が兵營に於ては同室より相前後して二三名を出したるのみか臥床相接するもの日を異にして發病し市內の各區に發生せるもの亦十數年前の建築に係る家

屋に住するものに限り新造の家屋に居住するものには絶えて同患者を見ざる等愈々一種の有機小體又は毒素が屋内に潜伏存在して氣候其他の關係により機を得て消化器より膽道及び肝中に入り所謂滲漏性黃疸を發し扨てこそ今回の小流行を來せるや明かなれば時節柄何人も居室の清潔を保ち時々空氣を流通せしめて寒威に恐れ炭火を熾にして閉籠るが如きことをなさず又寒冒に罹らざるやう充分注意すべきなり

●兒守の春遊に就て

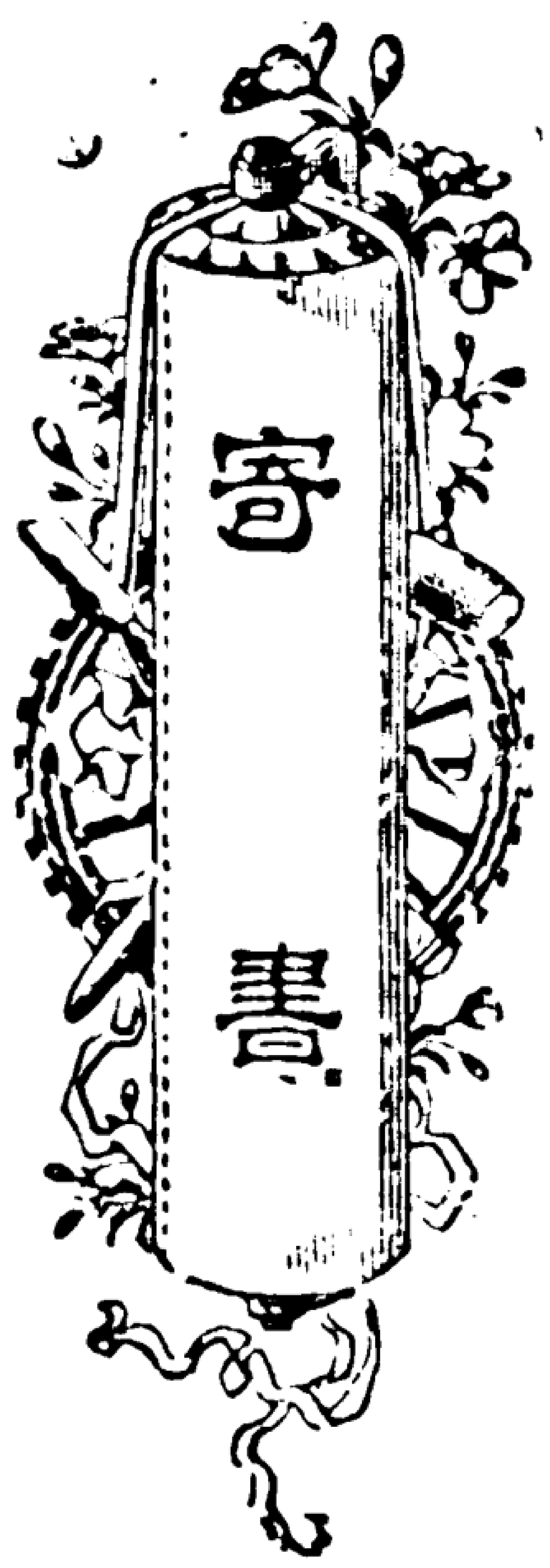
三島醫學博士の談

毎年の事ながら元日來屢々見受くるは兒守の嬰兒を脊負ひたるまゝ追羽子手毬つきをなし居ることにて世の母親は之に對し何等の注意も懸念も有せざるが多けれど、若し仔細に彼等の振舞を注視せば、頗ろ危險にして一刻も其注意を怠る可らざるものあり、何となれば兒守等は追羽子に夢中にて背負へる小兒の事は更に其念頭に上さず、然るに彼等の羽子をつく度に背上の小兒は頭を前後左右に振られ、最初は不快なるに堪へずグズ〳〵いへども、遂には心神朦朧として睡眠を催し來り、愈々頭を振らるれば、時々驚きて目覺むるなど姑らくも安靜を得ず、此の如きは往々腦振盪を招き、又單純性腦膜炎の因をなし然らざる迄も腦の疾患に罹り易からしむ、彼の夜驚症乃ち夜泣きなどいへることの原因は何れも之等に基するものなり、又手毬つきも之は腦の疾患にはさのみ原因たらざるも兒守等は只だ毬の方にのみ氣を取られて次第に打かゞめるより、自然背上の小兒は胸部を壓迫せられ、爲めに往々胃、肺、心臟等の病を釀すことあり、故に子を持てる母親は常に之等の點に注意して愛兒の健康を其害せられざるの以前に保持するに努むべきなり

●胃病の精神療法

胃病の精神療法に付ドクトル富士川遊氏の談話を得たれば左に之を摘記せんに曰「胃病に對して施すべ

き精神療法は第一に觀念の方向の上に意志の體操を施すにありてこは乃ち意思の有害的方面を避け正當の方面に進ましむるものにて固より胃の解剖的障碍に對してはこの療法の影響無きは論なけれども其精神障碍を去るには著大の効果を收むるを得彼のシヤルコー氏が胃の神經症患者を病院に入れんとて家族より分離して治療を加へ或は之を温泉村若くは其他の氣候療養地に送りて奏効せるの全く之が爲めなり又患者は醫士よりして胃病の本態を開知し其觀念の方面を正當の方面に進むるも亦必要にて第二には意志の發揚又は抑壓をなす所の體操を施すにあり乃ち甲は身體の運動により乙は水治法により之を用ゆるものなるが其第三は動機なき觀念によりて當該疾患の消散を圖るものにて之をズッゲスチオンと稱へ其最も單一なる方法は言語を以てするにあり乃ち醫士が其病症に就き保證を與ふるとにて然れば神經性及び殊にヒステリー性の人にありては此の必要最も大なりとす又物體的ズッゲスチオンといふものありて其方法としては胃部の平法電氣應用若くは感傳電氣應用を第一とし他には水治法プリースニッツ奄法胃の按摩法等あるが催眠術を用ゆるの必要は殆んど之れ無きが如く要するに先づ斯くくすれば必らず全治すべしとの確信を持すると最も必要なりと



會員におなじみ多き貴雜誌なれば一月の初刊へと原氏より寄せられたるが龜は万年の齡を經鶴も千代をや重ぬらんとは氏の家庭にして芽出度き限りなり

●松竹梅鶴龜万歳　原胤昭

子澤山は貧乏人の證據ですが、貧乏人の友は自から任じて居る處、予に十二月十五日又一男児を與へら

れ、是で一母總計十一人、七男四女で、旣や長女に孫三人、母殊に祖母には、私の孫は玄孫(やしやご)です、元氣なる祖母が龜登と云へる名に因み、長より五男までを、松竹梅鶴龜、を冠して命名す、六男が出た番外と來て、命名に困まつて御相談したら、それは萬歳て、萬歳の外あるまいと云ふ、下田歌子先生の御說、是れが祝福となつて、番外の番外まで生れ來て、歳胤でございます、是も年來天の御惠と大方の御賛助によりて、出獄人保護といへる慈善の業に働き居る、餘福と難有存じて居りますと實にも一母十一人を生れ而かも一人も缺けずとは芽出度き家庭とこそ云ふべけれ

御芽出度き家庭に因み左に高齢者を一二紹介致しましやう

●百三歳の老媼　麹町有樂町三丁目三番地に石田せいとて本年百三歳の高齢に達せるが元は旗本の娘にて鋤吉と云へる息子いと孝行ものにて今帝國ホテルの食事掛を勤めいと安らかに慰さめて居る今其媼の平生の養生法を聞くに鋤吉のすゝめにより常に肉食のみを多くし牛乳は毎日三四合飲み氣に向けば六七合も飲むと入浴は殆んど缺かしたことはない而して炊事一切は媼自からなす代りに餘り屋外の運動はせぬと驚くべきは眼は(らんぷ)の光で縫ひ物に差支なく歯は悉く揃ひ居り杖などは固より用ゐたことはなしといふ

●第二も百三歳の老媼　文化元年甲子七月の生れにて牛込區市ケ谷舟河原町に住し居り二女あり一人に養子をなし安らかに暮し居ると其平生ちよの食物は第一に好きなのは魚類で酒煙草は用ゐない運動は一體が外出嫌ひで孫の守りで澤山でしかも身體は非常に壯健で耳が少し遠いばかり眼は障りなく頭はゴマ鹽で背高く細面のすらりとした姿で若い時は嘸ぞ美人であつたろうと思はる只歯のせいか始終少しばかり首を振る昨今はさすがに炬燵を相手にし流石に柔かい食物をと選び居ると誠に芽出度長命の人とこそ

云ふべけれ

●子寶の醫學博士

從三位勳一等男爵錦鷄間祗候池田謙齋（天保十二年十一月生れ）と云へば舊幕の醫師故緒方洪庵の二男なり幼少の頃江戸に遊び醫學を修むる中當時の名醫池田秀眞の養子となりて天晴れの醫學者となり明治三年より同九年まで獨逸に留學し歸朝後は陸軍々醫監、大學醫學部總理、一等侍醫、醫學博士と云ふ肩書を有し日本の刀圭界に誰れ一人知らぬ人なき大家なるが流石は天下の名醫なり請ふ博士が家庭の賑かにして其の子寶なることを見られよ今より昔に遡りて夫れの總てを列擧せんか

一、養母久子（文政十二年生れ）二、養父二女幾子△（安政六年生れ）三、長男秀男（明治三年生れ）四、養母の妹甲子○（元治元年生れ）五、二男次郎（明治十一年生れ）六、長女とし子○（明治十三年生れ）七、三男謙三（明治十六年生れ）八、涼川子△（元治元年生れ）九、四男充四郎（明治二十一年生れ）一〇、五男友五郎（同二十二年生れ）一一、六男紘郎（同二十三年生れ）一二、二女道子（同二十五生れ）一三、三女瑟子（同二十六年生れ）一四隆文（同二十七年生れ）一五、四女深子○○（同二十九年生れ）一六、八男菊男（同卅一年生れ）一七、長女とし子（同十三年生れ）一八、次女すゞ子（同二十一年生れ）一九、三女清子（同二十六年生れ）二〇、四女榮子（同卅七年生れ）二一、長男駿次（同三十五年生れ）二二、次男秀一（同卅六年生）

如上二十二人の中段末に△印をつけたるは既に死亡の分○印をつけたるは他に緣づき居るものなり而して第十七番より第二十二番まで女子四人男子二人都合六人の子女あり是れは博士夫人甲子氏死亡後深川生れの島村イツ子と云へる一婦人が博士亡妻の跡を襲ぎて設けられし者ゆゑ斯く別看板に揭げしなり斯くて明治三年に長男秀男を生み始め三十七年の末子榮子まで十八人を設けたる中に二十五、六、七の三ケ年は續け樣に四人をもうけたり（即ち瑟子と清子とは異腹の姉妹なり）又三十五、六、七の三ケ年間にも續け樣に生れたり兎に角に主人博士と共に十七人の家族ある上に長男秀男氏（三十七）は先年鎌倉扇谷の男爵沖守固の長女房子（二十六）を迎へて長男秀一（四つ）長女佐知子（三つ）を設けたれば此の四人を合せて二十一人家族而かも水容らずの內輪同志とはまづ以つて芽

出度き博士の家族他に比を見ざる處と稱へつ可きなり



治庖會本部教場主事
安西こま子

▲卯の花蕪菁卷

徑二寸程の蕪菁を撰び、其皮をむき、之を木口より極く薄くへぎ、鹽をあてゝ暫らくおき、水にて洗ひ、水氣を切り、之を三杯酢につけおき（此三杯酢には蕃椒の種子を除き一寸と炙りかゝるものを少しく加ふべし）程好く味の付きたるとき之を目笊にあげ、汁氣を切り、之を編笠の形狀に折り其中へ卯の花を包み込みて松葉昆布の帯をなせしものなり而して卯の花の製法は雪花菜を擂鉢にて能く擂り尚ほ裏漉して鍋に入れ、文火にかけ之に生鷄卵一個を加へ絶へず菜箸四五本を以て攪拌しながら空煎を爲し又之に鰹節の濃き煮出汁を適宜に加へ、汁氣の切れるまで十分に煎付け、上りぎわに少しく醬油を加へ直ちに大なる平皿の如き器に移し能く冷して用ゆ又松葉昆布は先づぬる湯にて洗ひ更に之を沸騰湯の中へ投じザット煠てこぼして更に之をかぶらを漬けし汁の中へ暫らく漬くおき味をつけて用ゆるなり

▲鰤薄あん掛

ぶりを厚手の刺肉に作り、九片或は十一片づゝに分ち、蒸籠の中へ竹の皮を敷きたる上へおきて蒸し之を皿に盛り其肉の上へ薄あんをかけ、おろし生姜を添へ冷めざる中に侑むべし而して薄あんの製方は味淋を鍋に入れ、文火に掛け凡そ半分程に煮詰め之に醬油を加へ再び煮詰め、又之に鰹節の煮出汁を加へて其味を程好くつけ、一と沸しして鍋を火よりおろし、之に水にて溶かせし葛を徐々に垂らし込み、又鍋を火にかけ葛の變るを待ちて鍋を火よりおろすべ

し但し葛の濃さは蒸し肉にかけて流れちらざる程に緩くすべし

▲鮹柔らか煮

生たる小鮹を撰び、先づ左手にて鮹の頭を持ち右手の爪を鮹の足の挾にあてゝ數回こき下し、次に兩眼と鳶烏とを取り去り次に頭を裏返して腸を出し能く水洗してぬかりを除き、次に頭を切り離し、次に頸の處を一寸程切り取り次に八本の足を切り離ち、一寸二三分の長さに切りて之を鐵鍋に入れ、鮹が充分に被る程の鰹節の煮出汁と味淋とを加へ、落蓋を爲し強き火にて一回煮立てゝ更に文火にかけ凡そ一時間煮て、生醤油を控へめに加へ又一回煮立て上げぎわに前に控へし丈けの醤油を注し、ザット火を通すべし

●魚　肉

▲木皿豆腐

さらし葱

先づ豆腐を厚さ六七分の骰子形に切り、之ヶ水をはりたる深鉢に入れおき、別に深鍋に湯を沸へたゝせ此中へ鰡又は鯛又は穴子等の切肉を投じ半熟となるを待ち、網杓子を以て掬ひ出し他の器に盛りおき、而して魚肉を煮たる汁を煮立て此中へ人數に應して一人前豆腐三四片づゝと魚の切肉二三片づゝとを入れ、豆腐が煮へて鍋底を離れて浮き上らんとするを待ち、直ちに網杓子にて豆腐と魚の切肉とを掬ひとり之を木皿に盛り、其上より橙子の搾り汁に少しく生醤油を加味せる汁を注ぎ、さらし葱を添へ温き中に侑むべし又さらし葱の拵へ方は、葱の白き處を木口より薄く打ちて布巾に包み、之を水の中に入れ、手にて能くもみ以てさらせしものなり

▲トルニップス

●ホワイト、ソース

トルニップ即ち小蕪菁の皮をむき、之を淡き鹽湯の中へ投じて柔らかに煠で冷めざる中に皿に盛り、ホワイト、ソースをかけて侑むべし但しホワイトソースの製方は、昨三十八年十一月發行本誌第百九十

二號季節料理欄內にあり

▲ビーフ、ステーキ

百目の牛肉を三片又は四片に分ち、其各片の兩面を庖刀の平にて敲き、鹽と胡椒とを撒りかけ、之を平皿にならべ入れ、少しくヲリーブ油を注ぎかけて暫らくおき、別にフライ鍋（鷄卵燒鍋を代用するも可なり）を火にかけ、大匙半杯程の牛酪を落し入れ、牛酪が熱して色付たるとき、右の肉を入れ、厚さの六分程に火の通りしとき、裏返し更に他の片面を燒き之を皿に取り（肉片の中央が半熟となるを度となして燒くを適法とすれども我國婦人の多數は肉片より血汁の出るを好まざるにより斯の如く十分に燒くものと知るべし）、肉を取り出したる後ち鍋へ牛乳又はスープを少しく加へ一寸と火を通し、之を前の肉へ注ぎかけ、猶ほセリー酒又は白葡萄酒を數滴撒りかけて侑むべし

▲フーガデン

牛肉二百目と豚肉二百目とを先づ俎板の上におき、庖刀を以て細かく敲き、次に擂鉢に入れ、更に能く擂りて之に鹽と胡椒とを加味し、次に三個の生鷄卵を一個づゝ割り込みながら擂り交ぜ之に牛乳五勺を加へ尙ほ食麵包半斤（外面のかたき處を除き）を水に浸しおきて能く水氣を搾りたるものを加へて擂り混ぜ、之を牛酪を引きたる天盤の中へ蒲鉾の形狀と爲しおき其中央へ竪に煠鷄卵を一列に並らべて包み込み、其外面を庖刀にて縱橫十文字に切目を入れ、又其上へ牛酪の小塊を處々に撒布し之を天火の中へ凡そ四十分間入れおきて蒸燒き而して冷めしとき之を三四分の厚さに小口切にして用ゆるなり

▲ホワイト、プーヂング

●カスター、ソース

米利堅粉三十目と同量の白砂糖とを混合し之に少しく牛乳若しくは水を加へ流れざる程に固たく煉り又之に鷄卵六個の蛋白を能く泡立しものとレモン油數滴とを加へて能く攪拌し之を濕りたる布巾に包み蒸籠の中へ入れてむす（凡そ二十分間を要す）而し

て之を皿に盛り其上にカスターソースを注ぎかけて侑むなり又カスターソースの製方は牛乳五勺と鶏卵一個の蛋黄と適宜の白砂糖とを混じ湯煎になしてドロドロの液につくりしものなり

●新年の重詰料理（婦女通信人）

（石井泰次郎氏調）

▲羽子板かまぼこ　魚の肉をかまぼこの摺身になし四寸計りの杉の羽子板へつけて蒸す可し而して其の上に紅にて色々の摸様をつける

▲羽子の小鴨　小鴨の作身にしたのを細かく叩いて丸め、醤油味淋の煮立てたのへ鴨の皮を入れて更に能く煮、后皮を取出して先の丸めた肉を入て煮夫れを冷まして小羽を三本つゝ羽のやうにさして出す可し

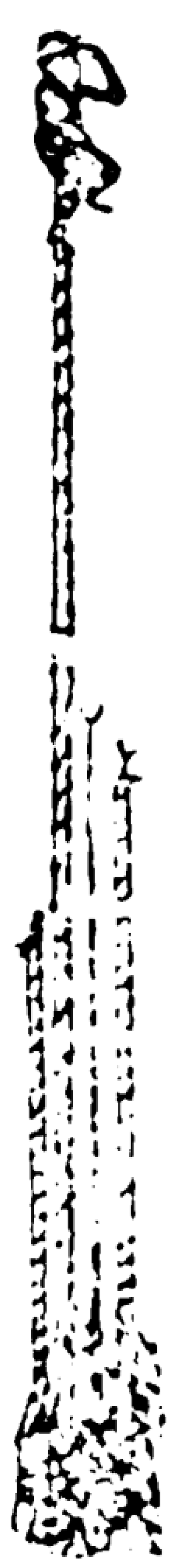
▲松風さより　さよりを腹より開き骨を去りて鹽水にて洗ひ能く水を切りてうねらせて竪に串に刺す而して焼きててりをしきケシを振りかけて用ゆ

▲雪の梅　長芋を一寸に切りて五角にし梅の花形に剝き煠でゝ味淋、砂糖、鹽にて味をつけ、別に長芋を煠でゝニシコにしてウキ粉を少し混ぜ夫れにて梅の花をつゝみて蒸籠でむす可し

▲末廣たけのこ　竹の子の皮を剝き煠でゝ穂の方を一寸五分計りに切り夫れから四分位つゝの切りかけにして開けば末廣の形の如くなる可し夫れを味淋と砂糖と酢と合せたるにつけてとうがらしの味を加へて能くつきたるを出して盛り合す可し

以上は重一個に見つもりたるものなれど献立の都合にて羽子板と羽子と、松風さよりと雪の梅とを各一重となし末廣だけを一重となしすべて三重とするも便なり

新年料理としては今や後ればせながら諸姉参考のためにとかくは記しぬ





新年會

餘興講談

大久保彦左衞門忠敎滑稽談

松林伯知口演

かゝる御席に罷出てまして講談を致しまするこ と
は、眞に此身の光榮に存じます、今日は御餘興とし
て大久保彦左衞門忠敎の御話を致しまする、元來彦
左衞門は德川の三代に仕へました御仁に致しまし
て、七十餘年の間隨分と德川氏の爲に御苦勞を遊ば
した御方でございます、お若い時分には唯武勇一徹
の人であつたが老年に至りましては、世の爲めにな
ることもやられたかわり、隨分奇談多く致して人の
耳目を驚かし、人の心を悉からしめた事も折々ある、
二代將軍秀忠公と云へる御方は溫厚篤實、三代將軍
家光と云へる御方は非常に武勇に富んでゐらせられ
る、其間に立つて彦左衞門が種々なる係りし事を致
しましたが、尤も天下泰平の後は幾らか氣が弛みま
して、昨日までの御戰爭を旦の夢と見て、何となく
遊びに耽けると云ふやうなことがあるから彦左衞門
は苦々しき事に思ひ、何時戰爭が始まるかも知れぬ、
片時も武勇と云ふことを忘れぬやうにと云ふので、
炎熱燬くが如き暑中でも一切笠を被らぬ、德川の時
代には頭髮を餘り長く伸しませぬ、況して老人だか
ら頭上は眞赤になつて居る、カン〳〵照りつけられ
るのだから嘸ぞ熱いてあらうと思はれますが、少し
も熱いやうな顏をせずに、若い者に供をして參れと
云ふ、固より笠は被らせぬ、若い者はちやんと月代
を剃つて、靑岱と巾して眞蒼な頭を日光に照らされ
るので熱いの熱くないの、ウン〳〵唸り出す、彦左
衞門が「頭の蒼い中はまだ不可、赭くなるまで照ら
されろ」若者「エッ、此上照らされては迚も堪りませぬ
が、どの位かゝれば赭くなります」彦左「されば、五十
年も照らされたら大抵赭くなるだらう……」是り

やア赤くなるてございませうが、此體を三代家光公が御櫓から御覧になり、今の者は皆な柔弱になつて、夏の日の炎天に笠を被らざる者なきに、彥左衞門老人の部下だけは笠を被らぬと云ふは天晴、感心の至りである、賞め遣はすと仰有る、所が彥左衞門は、賞められても格別難有くはないと云ふやうな事を言ふてゐらせられる。

或時彥左衞門老人が、千代田の御城を退らむと致す時に、伊達越前守忠宗公にお合ひ遊ばした、忠宗公には御顏色が惡い、御風邪でもめしたと相見える彥左「是れは伊達家、大層御顏色が惡いが何と致された忠宗「近頃病に犯されてナ彥左「イヤハヤ、戰場萬馬の中を往來した彥左衞門などは今日まで病んだ事はござらぬ、當時は鐵砲玉も頭の上を通らず、矢叫の聲も聞かぬ、矢衾をつくつた中を步かぬから柔弱に流れて病氣などに罹る、ウンと踏張つて居れば病氣などは來ぬもんだ忠宗「所が宗忠は病んで居る彥左「ヤさう云ふ病氣には戰場萬馬の中を往來した彥左衞門の活膽でも差上げたい忠宗「其方の活膽が何とした彥左「召飮れば御全快になるだらう忠宗「彥左、其方の活膽を飮めば全快を致すか彥左「いかにも御全快になるであらう忠宗「いづれ貰ひに遣はすぞ彥左「何時でもお出なさい、どうせ不用て居る活膽だ……」活膽に不用て居るのがあるべきものではないが、餘りに憎き高言であると云ふので、忠宗公館へお歸りになると其の翌日、伊達內記と云ふ者を召され銀の壺を持たしめて御使者に立つた、內記に於ては駿河臺錦小路、大久保の邸に來られ、用人の笹尾喜內に會つて、內記「さて喜內、足下の主人彥左衞門忠敎が、我が主人越前守忠宗は柔弱なるが故に活膽を飮ませろと云ふ依て、活膽を貰ひに參つた、彥左忠敎の膽を吳れまするやう御傳へ下さい喜內「ヘツ……」喜內驚いた、活膽を與るなんと言ふ主人も主人だが、貰ひに來る伊達家も伊達家だ、併しどうも仕方がないから奧へやつて來て喜內「エー御前……御前彥左「何だ喜內「伊達家から活膽を貰ひに參りました伊達內記

と申す者が……彦左「あゝ然うか、ナニ餘り忠宗の顔色が惡かつたから彦左衛門の活膽でも舐めろと言つてやつたものだから貰ひに來たんだ喜内「何う致しませう彦左「どうも困つたものだ、彦左衛門もまだ膽はやれない、やれば腹でも切らんければならぬ喜内「左樣で……彦左「ヤ、仕方がない、貴樣腹を切れ喜内「何の爲めに腹を切ります彦左「是れも主の爲だ予が代理に……喜内「エッ……どう致して、拙者のやうな臆病な膽は何の役にも立ちませぬ彦左「立つても立たなくても宜しい喜内「御前は宜しくても拙者は一向宜しくございませぬ、此儀は眞平御免を蒙ります、拙者も本年四十一歳、活膽を取られると生命が無くなります彦左「そんな意氣地の無い事を申すナ喜内「意氣地があつても無くても御免を……彦左「それでは何うも困つたなア喜内「然らば斯しては如何で、臺所に烏賊の鹽辛がございますから彼で遣はしませう彦左「馬鹿を言へ、活膽と烏賊の鹽辛とは違ふ喜内「ナニ違ひましても是れが彦左衛門の活膽でござると言つて差上げる、伊達家が召食つても格別御毒にもなりますまい彦左「ハツハヽヽ眞逆さうもなるまい、よし〳〵良い事がある、何か器物を持つて來たか喜内「銀の壺を持つて參りました彦左「それは僥倖だ其壺を此方へ取上げて仕舞へ喜内「是れはえらい事をなさる、シテ何うなさります彦左「土の壺があつたらう、あれを持つて來い、中へ分疏を書いて入れて遣る……」と彦左衛門が軈て筆を執つて、何かサラ〳〵と認めて封をして彦左「コレ喜内、之を内記と申す者に渡し、其方はさも〳〵彦左衛門が腹を切つたやうに泣きながら出て大螺を吹いて内記を追ひ歸せ喜内「エッ、それでは拙者が泣くので……彦左「いかにも喜内「併し、さう急に涙は出ませぬ彦左「芥子でも舐めろ喜内「ヘッ……」喜内も大きに弱つたが、固より如才のない男だから、何處を抓つたかポロ〳〵涙をこぼしながら出て來て喜内「ウッフッフッフッ…………(泣)眞にどうも伊達氏、ヒョンな事になりましてござる、自ら招いた禍ひとは申しながら、越前殿

の御前、武士に二言なし、よもや僞りも述べられず、主人彦左衞門儀、唯今腹を掻切り……臟腑を摑み出し……活膽を此中に入れ、之にて越前守忠宗の御病氣御全快に相成れば、彦左衞門は死すとも可なりと、死ぬる臨終のオロ〱涙、宜しく御持歸りの程願はしう存じます、覺悟の上とは申しながら、主從一世の臨終の別れ、喜内思はず歎きまする」とオイ〱泣いて居る」伊達内記も餘り喜内が泣くから、殊に依つたら腹でも切つたかしら、併し僞り多い彦左衞門の事だからどうか分らぬと思ひながら内記「ヤ、それは御氣の毒の至り、然らば此壺に活膽が入つて居るか喜内「何卒風に當らぬやう御持歸りを願ひます内記「ハ、ア、風に當つては宜しうござらぬか喜内「風に當ると膽が飛びます」膽が風で飛ぶもんか、内記は彼の壺を受取つて、馬に乘ると一鞭加へ、トウ〱トウ〱と立歸つて君前に罷出て壺を差出す忠宗「どうぢや内記、彦左衞門は何か申したか内記「ハツ、彦左衞門儀面目なく切腹いたしまして……忠宗「ナニ切腹……老人血迷ふたナ内記「如何にござりますか家來の笹尾喜内が歎きに沈みまして……忠宗「ウム、シテ銀の壺を持つて參つたが如何いたした内記「狼狽へまして己が方の壺へ入れました樣子……忠宗「開けて見い内記「ハツ……壺の紐を解いて開けて見ると何にもない、紙片が一つある忠宗「膽は無いテ内記「左樣で……忠宗「大方こんな事であらうと思つた」とつぶやきながら紙片を取上げて見ると

拙者儀昨日御約束申候得共よもや今日の御使者とも存ぜず餘りの事に膽は潰れて今日は無御座候

忠宗「さては銀の壺まで取上げられて仕舞つた、何とも仕樣のない老爺だ」と仰有つたが今更仕方がないから忠宗「よい〱捨て置け」と其儘にして置く、翌日になると彦左衞門がノコ〱やつて來て彦左「ヤ、昨日は銀の壺を難有う……忠宗「アッ、あんな事を言ひ居る、コレ彦左、活膽はどう致した彦左「膽活は當分不在だ忠宗「不在だと申して喜内が大層泣たぞ彦左「それは拙者の直傳て、彼は直ぐ泣きます」ア、言へば

斯言ふ、何とも手がつけられないから忠宗公も、どうも甚しい僞りであると遂ひには御笑ひなされる、所へ薩摩様が御客來で、闘棊の御勝負を遊ばされました、就ては何か御懸賞をと云ふ、貴顯方の御懸賞の事ゆゑ、何が宜からう、虎の皮が宜からう、イヤ虎の皮は不可、豹の皮が良い、なる程豹の皮が宜からう、豹の皮千枚づゝと云ふ御懸賞で遊ばした、所が伊達様がお負けになつた、忠宗公大きに弱つたが約束だから仕方がない、何れ此方より御屆け申すといふ其日は御分れになつた、さて豹の皮は何處にあると云ふ、是れは日本に在る物ではございませぬ、段々御尋ねになると朝鮮の咸鏡道に在る、それでは迚も間に合はない、九段の皮屋を開いて見やう、九段にも今不獵で無さうでございますと云ふ、どうも仕方がない、幸ひ彦左衞門が來て居つたから忠宗「彦左、何としたものであらう、彦左衞門一向平氣で「ナニ宜しうござる、豹の皮の千枚ぐらゐはどうか致す忠宗「必ず調へて呉れるか彦左「確かに調へます忠宗「然らば何分賴む」と若干の金子を彦左衞門に御渡しになる、彦左衞門之を受取つて立歸り、金子は費消して仕舞つたが豹の皮は集まらない、其中に島津家から御催促だから伊達家から彦左衞門に催促すると彦左「コレ〳〵喜内、豹の皮を持つて參らう喜内「豹の皮はございませぬ彦左「無いことはない、米屋へ行つて俵千枚を持つて來て長持の中へ入れろ喜内「どうなさいます彦左「あれがひようの皮だ喜内「イエあれは米の皮で……彦左「馬鹿を言へ、一俵二俵と云ふから俵の皮だ喜内「なる程俵の皮でございますナ彦左「伊達家でも歡くだらう喜内「貰ふ方では何ぼ歡きます彦左「それは承知だ、併し伊達家が迷惑をしては不可から彦左衞門が使者に立つ」と云ふので、是れから供廻りも例よりも多くして島津の御屋敷へ乘込む「御使者、大久保彦左衞門殿……」と云ふ聲がかゝりと共にズツと通ると、島津家重役の方々、是れは德川の御意見番大久保彦左衞門殿、宜うこそ御入來、今日は伊達家の御使者で……彦左「いかにも越前殿の御使

者でござる、豹の皮を千枚持參いたした」と御書附を其處へ出す、重役の方々が御覽になると俵の皮と書いてある「ヤツ彦左ちう男は十六歳の初陣より戰場萬馬の中を往來してえらい强い男ぢやが學問ちうものは無い、文字を解すことが出來ぬので獸の豹を俵ちう字を書きよつた、アツハッツハ、、、・」と笑つたが中々間違へたんぢやない、其中に御前體御披露を申上げると、島津の君公其場へ出てさせられまして御機嫌斜ならず、彦左「彦左、太儀であつたぞ、豹の皮を即刻見たい、アイヤ誰かある、豹の皮を入れし長持此處へ「オー……」軈て長持を持出す、蓋を取つて見ると俵が出た、さては下の方に這入つて居るのかと思ふと出るのも〳〵俵ばかり、他の物は何も出ない島津「彦左、豹の皮は何とした、彦左「それが即ち俵の皮で島津「ナニツ……彦左「一俵二俵と申すから俵の皮……島津「おのれ彦左、僞り居るナ、豹と云ふのは即ち獸のことだワ彦左「是れはしたり、島津の君の仰せとも存じ申さぬ、日本に豹と云ふ獸

のあるべき理なし、又朝鮮國には有之と雖も、千枚の豹の皮は一朝一夕にして得ること能はず、且つ伊達家は蝦夷「おろしや」の防備として彼の地に居れど豹を得ること叶はず、それ故に何かな豹に似寄りの物を持ち參れとの越前殿の御依賴に、據どころなく彦左衞門、七日七夜考へて漸く調達いたしたる俵の皮、豹の皮は着いたして暖きもの俵の米の袋にして着れば暖い、一俵二俵と申すゆゑ即ち俵の皮、若し之にて惡しくんば彦左衞門を御手討になつて然るべし、且又重役の方々に差上げました書附にも俵の皮とござる」重役方が之を聽くと「アツ彦左衞門に騙められた、先方が無學だと思つたら此方が疎忽てあつた」島津の殿樣も御驚きになつたが「よい〳〵、彦左衞門のすることは面白い、何方も着すれば暖いて宜しい今日は免す彦左「難有がり奉つる島津「臣下の者へ此の俵の皮を一枚つゝ取らせるぞ──「難有う存じます」ナニ有難いことがあるもんか甲「拜領の俵だ、一枚づゝ背負つて參らう乙「如何仕つります甲「仕

様がないて戸外の泥濘へても敷きませう乙「然らば特別の思召を以て二枚づゝ下し置かれる甲「イエもう是れて十分、決して遠慮は仕つらぬ」と一同愚痴をこぼしながら頂戴する、彦左衛門へは琉球泡盛に氷砂糖の御馳走、忠敎御禮を申上げて氷砂糖の大きな奴を口の中へ入れると口一杯になつて仕舞つた、歯て噛まうとするともう歯は拔けて歯齦ばかりだから噛くだけない、と云つて吐き出す譯にもいかず、啞が芥子でも舐めたやうに顏を顰めて口をモゴ〳〵泡盛を入れて少しづゝ溶して居る、其の苦しさと云つたら軍さに出るより苦しい、島津公之を御覽になつて呵々とお笑ひになる、重役方も可笑しくて堪らぬ腹を抱へてアッハッハッ、、、彦左衛門は可笑しい所か、グッグッ言つて居たが漸く氷砂糖を飲込んだ島津「彦左、どうぢやナ彦左「ウエッ……、十六歳の初陣より今日まて、斯の如く苦しんだことは大阪の軍さと今日ばかり、あゝ苦しい、軍さより餘程苦しい、もう〳〵孫子の代まて氷砂糖の御馳走にはならせませぬ島津「ヤ彦左、何か面白い話を致せ彦左「もう今日は何も出來申さぬ島津「然らば其方に馳走いたさう、何なりと食物を望め彦左「難有うござる」と言つたが何を望まう、此頃めすり膾と云ふ名は承はつたがまだ食つたことがない之を一つ所望致さうと彦左「めすり膾を頂戴いたしたい島津「よし〳〵」と直樣御膳部方へ申付ける、所が御膳部方てはそんな物は知らない、何だらうと評議が始まつた、すると一人が甲「めすり膾と云ふのはお玉杓子に蕃椒味噌を掛けて食べますので……乙「何だ詰らぬ物だナ、シテ見ると大久保もまだ知らぬのであらう丙「イヤ、殊に依ると數箇度の戰場に臨んで折々は食べたんだらう乙「然うかも知れないが大方存ぜぬのだらう、然らばそれを拵へさつしやい甲「イヤ唯今はございませぬ乙「無いことはない、何處かに居るだらう甲「唯今秋てございますから皆な蛙になりました乙「なる程是れは然うだ、ナニ構はない、蛙を捕つかまへて出せ甲「宜しい」と是れから大きな蟇を捕へて來て清

らかな皿へ載せたがノソ〳〵歩き出すから糸を附けて縛つて、其上へ蕃椒味噌を澤山掛けた、活きて居るのへ掛けたのだから蛙こそ災難、それを彥左衞門の前へ持つて來ると、蛙は眼へしみるものと見えて頻りに眼をこすつて居る甲「彥左衞門殿、さゝ召食りますやう彥左「ヤッ、是れは何だ甲「蛙の眼こすり膾彥左「大變な物を持つて來をつた、彥左衞門初めて見參に及んだ」併し自分が好んだのだから食はない譯にはいかない、固より負ける事の嫌ひな老人彥左「是れは美味さうた、早速頂戴いたす」と小柄を拔いて蛙の腹を切つた、どうするかと見て居ると、其處へ口を當てがつてチュー〳〵吸たから蛙はペチャ〳〵になつて仕舞つた彥左「もう一つおかはりを頂戴いたしたい」「ヤッ剛情な老爺だ、ソレッ」と云ふのでもう一層大きな蛙を持つて來た、彥左衞門も腹の中では大きに弱つたが、彥左「眞に結構でござる、遠慮なく頂戴いたす」到頭二疋の蛙を吸つて仕舞つた島津「彥左、皮は何うぢや彥左「ウエッ……是れは生ては御免を蒙る、めすり膾は吸ふものに定つて居ります島津「ヤ、免す、戾れ――「ハヽッ」彥左衞門這々の體て戾つたが其晚から病氣になつた、翌日は非常な發熱甲「老人何うした、風邪でも引いたか――「イヤかいろ熱と云ふので中々暖かい」どこまで剛情だか分らない。

すると或日のこと、酒井讃岐守殿より御招きでございますから、何事ならむと御屋敷へ出ると讃岐「ヤ彥左、大椿事が起つた彥左「何事でござる讃岐「餘の事ではないが、此度中宮の御祝ひに臨んで、近江八景の繪を日本全國の畫家狩野、土佐などに命じて一景づゝ描せる、然るに中宮樣の御仰せには旗本の近藤登之助に粟津の晴嵐の繪を描かせよとのことゆゑ、彼に申付けたる所登之助大に憤つて、畫家でないから描かぬと云つて參つた、併し描かせぬとあつては中宮に對して相濟まず、甚だ困却して居るのだが、何と彥左、彼に描かしめて吳れんか彥左「ヤッ、如何なる事かと思つたらそれしきの事か、宜しい、彥左

衛門忠敎が速かに描かして見せる」と容易く承知に及んだ彥左衛門、直樣近藤の屋敷へやつて來た、唯今の近藤登と云ふ御方は遼陽の戰爭に名譽の戰死をなすつたやうでございますが、今日まで殘つて居る登が其の時分眞盛であらしつた彥左「ヤ、登登之「是れは老人、よく來た、酒でも飮まるゝか彥左「イヤ酒は飮まぬ、今日酒井讃岐に繪を賴まれたさうだナ登之「そんな事を言ひをつたが予は畫師でない、讃岐が頭を低げて描いて呉れいと云ふなら兎も角、大名で候の何で候のと大きな顏をしをつて、此の近藤がナニ描くもんか彥左「ヤ有理だ、どうだ彥左衛門に描いて呉れ登之「老人、何か賴まれて來たナ、今は描けぬ兩三年の中に描いてやらう彥左「兩三年では何にもならぬ、今描いて貰ひたい登之「それは不可彥左「どうあつても描いて呉れぬか登之「老人諄い、いかぬ／＼彥左「それならば強て賴まぬ登之「強て賴まれぬ彥左「それては是れて別れる登之「予も馳走をせぬ彥左「此方も馳走にならぬテ、時に登、此間伊達忠宗から貰ふて來た物がある登之「ホヽー何を貰つた彥左「朝鮮國王が愛されて居つたのが日本に渡つて豐太閤の御手に觸れ、更に伊達政宗に下し置かれた五色の蔦と云ふのを貰つて來たが實に美麗なものだ、貴樣のやうな風雅人は見たからう折に觸れて見に來い登之「ナニ、朝鮮傳來の五色の蔦と云ふ事は聞いては居つたれど未だ見しことはない、仰ぎ願くば登之助に見せて呉れんか彥左「見せる所でない、次第に依つたら貴樣に贈つてやらう登之「ナニ吾輩に下し置かれる彥左「あゝあゝ遣はさう登之「それは眞實でござるか彥左「僞りは言はぬ、武士に二言はない登之「所が老人には折々二言がある、眞實下し置かれるか彥左「直ても與る、併し繪を描くか登之「繪を……描けば相違なく下さるか彥左「相違なく與る登之「宜しい、然らば描く」是れから近藤登之助が齋戒沐浴に及んて、二七日の間精進潔齋して描いた、實に美く出來上つた粟津の晴嵐、之を箱に入れて大久保の方へ屆ける、從尾喜內が受取つて彥左衛門の前へ出る、彥左衛門之を開いて見

てうなる程美く出來た、宛然粟津に遊んだやうな心地がする、之を酒井讃岐に屆け、中宮に奉りなば嘸ぞかし御悦びなさるてあらう、それにつけても槍を執つては萬夫不當の登之助、筆を執つては斯く巧みなる繪を描くとは感心々々〳〵」と頻りに賞めてゐらつしやる喜内「時に御前、粟津の晴嵐を描いた代りに朝鮮傳來の五色の蔦を貰ひたいと申しますが左樣な御約束をなさいましたか彦左「ウン約束した喜内「ございませうか彦左「無い喜内「矢張活膽流でございますか彦左「まア其の筆鋒だ喜内「よくない筆鋒でございますナ、何と申しませう彦左「大切な品だから此方が持つて參ると言つて歸せ喜内「心得ました彦左「時に喜内、何か持つて行かぬと近藤が怒つて來る喜内「何を持つて參りませう彦左「されば、何か蔦に似た物はないか――オー彼處に柊がある、少しは蔦に似て居るやうだ、是れて宜い〳〵」と是れから御自分で枝振の宜さうなのを切つて鉢に植え、胡粉と紅柄て葉をお塗りになつた彦左「どうだ喜内立派になつたらう、まだ五色ぢやないが三色に負けて置け、是れて結構だ、之を箱に入れてナ、五色の蔦だと云つて貴樣が持つて行きさへすれば宜いだ喜内「それて宜しうございますか彦左「宜いサ併し貴樣は餘程うまく逃げて來ぬをいかぬ、彼は槍の名人だ喜内「へヽー彦左「長押に槍が掛つて居る、逃げ方がまづいと其槍を取つて貴樣と突くテ喜内「突きますか……命がけてございますナ彦左「固より……仕方がない突かれたら一突ぐらゐ我慢いたせ喜内「一突ぐらゐ我慢せいと仰せられますけれども突どころが惡いとえらい事になります彦左「えらい事になつても構はぬ」笹尾喜内大きに驚いたが仕方がない、日の暮合になつて近藤の屋敷へやつて來た、近藤登之助は朝鮮傳來の五色の蔦が手に入つたと云ふので大恐悅、喜内を一室に通して登之「喜内、太儀てあつた、今日は馳走いたすぞ喜内「難有い仕合せにございます」ヒョイと振かへつて見ると槍が掛つて居る喜内「御前、此處に御槍がございますナ登之「ウン此槍は大した槍てナ、前の上樣から父

が賜つたのだが血見ねば止まぬと云ふ槍だ、何か事があつたら試めして見やうと思つて居るがナ喜内「ヘッヘ、、、」腹の中てえらい所へ這入つちまつた、露顯に及んだら一突、もう逃出さなくつちやなるまい……、そんな事は知らないから登之助「コレ〳〵皆なの者來て見い、朝鮮傳來の五色の蔦だ、流石美麗だナ、天下稀なる珍物だ家來「へ、ー、なる程大した物に相見えます、實に美麗てございます」と大勢が見て居る、喜内は氣が氣でない、露顯すれば槍になる喜内「ア痛タ、、、登之「喜内如何いたした喜内「腹痛を覺えます登之「ナニ腹痛だ喜内「一方ならぬ腹痛て、御次の間て休息いたしたう存じます登之「然らば次へ退れ喜内「ア痛タ、、、どうぞ襖をお開きを願ひたい……序でに雨戸もお開きを願ひたい、拙者は風に當りませぬと病が癒えませぬ甲「妙な病氣だナ、ソレ雨戸……喜内「序でに切戸もお開きを……甲「切戸を開く病氣と云ふのがあるか喜内「どうも餘程變てございます……」此方は坐敷で家來「如何てございますか、どうも柊に似て居りますナ登之「馬鹿を言へ、朝鮮傳來の五色の蔦、柊に似て居ると云ふことがあるか、少し植物學ても研究しろッ」と言つたが登之助、氣にかゝつたものかちよいと觸るとボロ〳〵色が剝げる登之「ヤッ是れは不思議だ、また老爺に騙められたか」と手を掛けるとヒヨイと拔けて仕舞つて根も何もありはしない、疑ひもない柊だ、登之助烈火の如く怒つて「吾を欺いて粟津の晴嵐の絵を描せ、節分の鬼と心得て柊などを寄越しをつた、憎くき老爺、其儘に置くべきや、喜内待てッ」と云ひさま槍をおッ取つて玄關まて走り出る、此方は喜内、ソーヲ來た、突かれて堪るもんかとポン〳〵逃げ出す登之「喜内待て……喜内……コリヤ馬引けッ……」忽ちに馬に跨ると逸散に追蒐ける、喜内は一生懸命、馬て追はれては敵はぬから大久保彦六の家へ飛込んだ、登之助は逸散に駿河臺なる大久保の門前に來ると馬を乘捨て、ヅカ〳〵ッと奧へ踏込んて登之「老爺覺悟」と彦左衛門に對し

て槍をピタリ附けた、彦左老人は黒木綿紋附の衣類、小倉の袴、片邊に孫子の書を置いて、後方には東照權現の軸を掛け、神酒を供へてある、此の物音に此方を振向いたが扇子を以て體を構へ彦左「扣えろ扣えろ、老ひたりと雖も彦左衞門、汝等の爲に田樂差にはならぬ、十六歳の初陣より戰場往來の老爺だぞ、コレ氣を鎭めてよく承はれ、此度貴樣に繪を描かしめたのは、なる程彦左衞門が僞つた、なれども中宮とは誰が御事を申す、前の上樣の姫君にして、武門より中宮に立てられたる御祝ひとして、全國の畵師に八景を描けよとの仰せ事、難有がり奉つて筆を執るべきに、汝傲慢にも御斷り申上げたりと上樣御召されなば、御怒り觸れて縛り首にも相成るは當然、さりながら安城以來の舊家にして德川の忠臣近藤登之助をムザ〳〵殺すに忍びぬゆゑ、殊更に汝を欺いて描かしたるなり、されば欺いたるは彦左衞門の智、欺むかれたるは汝の愚だ、己れの身に顧りみれば左や右う言ふ所はなからう、何うぢや、突くなら突け、彦左衞門が汝等如きの槍先にかゝつてならうか、さ、突け〳〵」言はれた時に近藤登之助、今までの勇氣は頓に消え、槍をがらりと投捨て登之「もういかぬ、敵はぬ、恐入つた彦左「何が恐入つた登之「何だか分らぬが恐入つた、迚も老爺を突くことは出來ぬ、後方に東照權現の軸がかゝつて居るのと、老爺の眼が光るんで迚も敵はぬ、驚き入つた彦左「謝罪るなら勘辨してやる登之「謝罪る〳〵彦左「それならば貴樣と拙者の間柄だ、免してやる、併し粟津の晴嵐はよく出來た、感心だ登之「賞めて貰つても難有くない、節分の鬼と心得て柊なんぞを寄越すのはひどい」所へ笹尾喜内が「唯今歸りました登之「喜内か喜内「御意にございます登之「ヤどうも貴樣はうまく逃げたナ、病氣になつて戶を開けさせるなんぞは巧いもんだ喜内「ヘツヘツ、、、あれは孫子呉子の兵書に明かなる所で……

……登之「馬鹿を申すナ彦左「ヤ喜内、よく逃げたナ、今日は近藤に馳走をしてやれ喜内「何もございませぬ

彦左「何かありさうなもんだ喜内「何もございませぬ

彦左「鰯があつたら喜内「鰯はございますが酒がございませぬ彦左「ナニ酒が無い、大きに賄方が不都合だ、近藤紙入を出せ、酒を買はう喜内「近藤の御前遠慮なさるナ」近藤はえらい目に遭つた彦左「是れてよい、時に近藤は馬に乘つて參つたさうだ、彦左衛門の馬は此頃疲勞していかね、貴樣の乘つて參つた馬を拙者が貰はう登之「馬までお取んなさるか彦左「取ると云ふ譯てはない、彦左衛門の馬を其方に渡し、其方の馬を彦左が貰ふに何の仔細やあらん」と無理に貰つて仕舞つた、全體大久保には五頭の馬がなければならぬのに其馬が無かつた、後に伊達忠宗公の馬を一頭、阿部四郎五郎の馬を一頭、阿部豐後守忠秋と云へる御方の馬を一頭お貰ひになつて五頭揃つた、大久保彦左衛門馬揃ひと云つて、阿部豐後守忠秋が、武藝の達人なるが故に大に慢じましたのを、三代將軍家光公の御前に於て取つて抑へたと云ふ、是れは別の御話てございますが、近藤登之助は粟津の晴嵐の繪を描いた爲に非常に御賞めに預り、中宮より賜物がありましたが、是れは代々寶物となつて、德川家御盛んの頃には本郷に屋敷を構へ、時々お祭りもありしと云ふ、五色の蔦と云ふ御話、大久保彦左衛門傳記中の一節之にて御免を蒙ります。

中外彙報

●胎兒死體保存方法

近年社會の進歩に伴ひ生存競爭の激烈なる結果東京、大阪、京都の三都市を始め各地方を通じ市街地に於て、流產するもの多々之れあるの結果其出產期に近からざる胎兒死體保存方に關し各地方より其筋に伺出づるもの有之趣きなるが其四箇月以上の者は埋葬の制裁あるも四箇月未滿の者は何等制裁なく其父兄と醫師間に於て協議し之を自由に附するに差支なく又醫學研究の資料に供する時は四箇月以上の場合に於ては醫師及び胎兒の父兄の連名を以て出願せしめ許可の上保存せしむることにせば差支なしと尙又右死體保存後不用に歸したる際は埋葬認可證に

對する手續は保存主並に胎見の父兄をして連者出願せしめ若し連署を得ざる場合には其理由を記述して所轄警察署及市町村長に請求し認可を受くべしと

▲癩病豫防法案　癩病豫防法制定の議ある由は曾て報道せしが尙ほ聞く處に依れば前年傳染病豫防法制定の際癩病は單行法として別に豫防法を制定することゝなり之を除外したるが其後內務省に於ては同病に對する豫防法に就き夫夫調査しつゝありて次第に據りては本議會に同法案の提出を見るに至るべき運びとなり居れる由にて同法案の內容は世界の癩病國として名ある布哇の豫防規則に則る處多しと云ふ而して布哇の同規則は主として患者を隔離するにありて一朝同病患者の發生を見たる時は地方官直に其患者を一定の隔離所に送致し患者の狀態如何に依りては隔離所に於て相當の勞働に就かしむることを得せしめ隔離所には同病患者にあらざるものは如何なる事情あるにも拘らず衞生局が隔離所と定めたる場所を訪問若しくは止ることを許さず若し訪問を要する場合は衞生局長又は同局長は附與せる特別の權能を有する官吏の許可書を得たる上ならでは近接することを許さず萬一許可書を有せずして隔離所に入りたる者及び患者の發生或は患者と知りて自己の家屋に入れし者等は罰金に處し罰金を支拂ひ得ざる者に對しては相當の禁獄に處し指定せざる車船等には搭載を許さず禁を犯したるもの亦相當の金刑若しくは體刑に處する等なり、而して我が國現在の患者總數は從來隱蔽等の弊害ある爲め正確なる統計を得難きも男患者約二万一千、女患者約九千四百餘、計約三万餘人なりと云ふ

▲最も頭腦を痛める職業　或る學者は近頃種々の職業の人から狂者精神病者を出せる數を統計に採つて職業の頭腦を苦しめる一般の程度を明にした、其の結果によると軍人が最も心勞すると見えて十万人中百九十九人精神病者を出して居る、其次は自由職業者で先づ美術家法律家其れから醫者傳道師文學者などで此等の人からは大略十万人中百七十七人の精神病者を出す比例になつて居る、下女下男勞働者からは同上百九十五人の比例で機械的職業に從事せる者よりは同じく六十六人に減じ、最も少なきは商人で十万人中僅に四十二人の精神異狀者を出すに止まつて居る

▲癩病と死亡數　公衆衛生の普及と共に近來癩病に對する世人の注意漸く密となり本問題の研究亦愈々盛ならんとするの今日參考迄に該病の散在地及び死亡數を掲げんに專門醫家の說は孰れも熊本、鹿兒島、宮崎三縣を始め九州一圓を首位とし之に次ぐを四國とし東海道にては愛知、靜岡の兩縣最も太だしく阪神地方と東北諸縣とは其次位に居るものにして又山陽道の岡山、山口二縣も可なりに多數なるが如く東京附近の諸縣は割合に少數にて北陸道の諸縣海岸線を接する京都府及び山陰諸縣は一般に同患者少しと今內務省最近の調査によりその死亡數を擧ぐれば東京三五、京都二一、大阪五九、神奈川二二、兵庫八二、長崎四九、新潟三〇、埼玉一六、群馬四三、千葉三九、茨城三九、栃木三七、奈良二六、三重三五、愛知一〇三、靜岡七九、山梨二四、滋賀三一、岐阜四四、長野二八、宮城四一、福島四二、岩手六三、青森六〇、山形三六、秋田四九、福井七、石川一六、富山五、鳥取一四、島根二六、岡山四五、廣島三〇、山口八〇、和歌山三〇、德島五七、香川四三、愛媛七三、福岡八九、高知五二、大分九八、佐賀四六、熊本一六九、宮崎一〇二、鹿兒島一二一、沖繩五〇、北海道三〇合計二、三一六なりといふ

▲不眠療法　巴里衛生會議にてドクトルムーチ氏は不眠療法として床上に平手を輕くひたひの上に置き双手の關節が恰も鼻穴の上に來るべき樣にすべしさすれば顏部の平面に溫度を與へ鼻穴より來る呼吸もまた溫度を與へ來たりて遂に睡眠を催ほすべしと說けり

▲吃音矯正と海氣吸入　吃音矯正術に熱心なる伊澤修二氏は今回相州酒匂海岸なる同氏別邸を以て實地矯正部に充て海氣練習を爲すことに決したるが同氏の談に依れば海氣吸入が總ての呼吸器病に有效なるが如く吃音矯正の呼吸練習にも特に海濱を以て最も有効とする由にて同氏は親しく患者に接して吃音の原因、腹式呼吸法、聲帶張開法、母音發音法、子音發音法等を授け舌本、舌上、舌頭、唇、鼻等の密閉音の練習をも行はしむる筈なるが全部修了は約二十日間を要し若し定期日數の矯正を受る能はざる事情

ある者には一週至乃至十日間にて普通練習の一部を授け其餘は通信矯正法を以て効果を收むる筈なりと云ふ

▲低廉なる新殺菌劑　倫敦の市醫のアレキサンダー博士は、先頃同市會に電氣を通じた海水は、非常に强き殺菌性を有して居るものであるとのことを報告して、從來使用されて居る諸種の殺菌劑の代りに、此海水を使用されんことを主張して居ると云ふのは、此海水を使用すれば從來の費用の三十分の一にて事足りるから、經濟上大に利益である、經濟上便益が大なれば、從つて之を使用することも容易になつて、衞生上に及ぼす効果は決して尠少でないからと云ふのである。

▲府下に於ける自殺者　年々增加の傾向を呈し、殊に生存競爭の結果、精神病者となり自殺を企てたるもの多數なるは、注意すべき事である▲去三十七年中の自殺者は、既遂五百一名、未遂二百七名で、其内既遂男三百四名女百九十七名、未遂男八十九名女百十八名、其原因別を見れば▲既遂は精神錯亂百五十五名、生計困難八十五名、痴情より來るもの十八名、淫逸遊蕩より來るもの十九名、病苦より來るもの六十五名、家内不和より來るもの十二名、老衰不自由を歎ぜるもの十五名、其他二十六名、原因不詳百六名等なるが▲尙又累計比較は、三十三年四百六十九、三十四年四百六十五、三十五年四百六十五、三十六年五百三十六

▲油劑服用の良法　毎年冬季に入るごとに肺、心臟、肋膜、氣管支、等の疾患あるものは體温を保持するの一方法として肝油を服用するを最良とせしが元來肝油には一種の惡臭あり薄荷油等之に混ずるも其臭氣を打ち消すこと難く爲に婦人の如きは往々之を口にするを厭ひ醫師及び看護婦は其服用をすゝむるに際し頗る困難を感ずるを常とす然に佛の教授ボアセル氏は下の如散藥を以て泡沸液を作り之に肝油を加へ與しに小兒と雖もよく之を呑み得たりといへり果して然らば肝油の惡臭を厭ひ服用せざりし病者は容

易にその服用を續くるを得べし散藥とは亞刺比亞護謨末、甘草及び乳糖の三者を合劑せるものにて更らにヴニラアを加へなば美味を添ふることも兼ね得べしと

▲人間筋力の最も強盛なる時期　身體の筋肉は身體の他の部分の發達と共に發達し其變退と共に衰退する者である、而して云ふまでもなく吾々人間の體力は或る年限まで發達して後は段々と衰退するが偖人間の體力は何歲頃が最も旺盛であらうか、英國のある學者は種々の年齡の人數千人を試驗して此に對する答を得て居る、其結果によると十七歲に於て青年が差し揚げ得る重量の平均は二百八十封度(一封度は我百二十匁餘)、廿歲の時の平均は三百二十封度、卅歲から卅一歲の初年は一番筋力の盛な時で平均三百六十五封度、卅一歲の後半からは少しづゝ下り坂に向ひ初め、四十歲に至り八封度減じ、五十歲に至りて三百三十封度に落ちる、此れから先きはズン〳〵と落ちるが其度合が五十以前の時より甚だしく又各人に於ての相異の程が餘り甚だしいので確に統計によることが出來ないと云ふ事である

▲營口同仁病院　同病院は營口居留本邦人と同仁會が協力し營口兵站司令官奥倉陸軍中佐監督の下に建設せられしものなるが其の建築略ぼ竣功せしを以て醫學士松井甚太郎氏を同病院長として同仁會より推薦し近々赴任する筈

▲醫術開業試驗施行地及期日　本年第一回の同試驗に關し左の告示ありたり

一　試驗施行の地

前期試驗	地方廳所在地
後期學說試驗	同　上
齒科學說試驗	同　上
後期實地試驗	東京、大阪、仙臺、長崎
齒科實地試驗	東京、大阪

二　試驗期日　明治卅九年四月二日より開始す
前期試驗、後期學說試驗、齒科學說試驗の日割及後期實地試驗、齒科實地試驗を受くべき者の氏名及受驗日時は委員長之を公告す

三　願書提出方
前期試驗出願者は其の試驗を受けんとする地の地方廳に願書を差出すべし後期試驗及齒科試驗出願者は其の願書に學說試驗を受けんとする地の外實地試驗を受けんとする地をも記載し學說試驗を受けんとする地の地方廳に差出すべし但し實地試驗のみを出願する者は居住地の地方廳に差出すべし

四　受驗地の變更
願書提出後止むを得ざる事項に依り受驗地を變更せんとする者は二月末日までに曩に試驗願書を提出したる地方廳に其の申告を爲したる者に限り之を許可す

▲藥劑師試驗施行地及期日　本年第一回の試驗に關

し左の告示ありたり

一　試驗施行の地

學說試驗　地方廳所在地　實地試驗　東京、大阪

二　試驗期日　明治卅九年四月六日より開始す

學說試驗の日割及實地試驗を受くべき者の氏名及受驗日時は委員長之を公告す

三　願書提出方

試驗出願者は其の願書に學說試驗を受けんとする地方の外實地試驗を受けんとする地をも記載し學說試驗を受けんとする地の地方廳に差出すべし但し實地試驗のみを出願する者は居住地の地方廳に差すべし

四　受驗地の變更

願書提出後止むを得ざる事項に依り受驗地を變更せんとする者は二月末日までに曩に試驗願書を提出したる地方廳に其の申告を爲したる者に限り之を許可す

▲病牛を食して百名死す　仁川領事館管內富平郡に於て先日中病疫に斃れたる牛肉を食し韓人百名死亡したる報ありたるに付取調たるに右は事實なるものゝ如く病疫は炭疽熱と信ぜらる但し其の後蔓延の報に接せずと此程加藤領事より其筋へ電報ありたりと

▲日露戰役救護紀念章　日本赤十字社は、客年日露開戰以來施行せる救護事業紀念の爲め、陸海軍戰利銅製類の下附を得て、救護紀念章を調製し、救護員並救護事業に與りたる者及一般社員（救護事業決了後臨時總會當日に至る現在社員に頒與する計畫にて、其人員は百二十餘万人に達し、陸海軍從軍紀念章と伯仲にありと云ふ、尙同紀念章調製方は、砲兵工廠に依賴する由なるが、之が鑄造容積を數量にて示せば、千二百餘キログラムの多きに達し、野砲百餘門を毀すと云ふ

▲韓國衞生に付建議　大日本私立衞生會は去月左の建議書を內閣總理、內務、外務の各大臣及び韓國統監に提出したるが尙同會にては韓國居留帝國臣民の健康保全及び居留地附近韓人の衞生思想啓發を圖る爲め差向き同會雜誌中に「韓國衞生の一欄を設け且每月同國諺文を以て簡易なる衞生事項を編述せし韓國附錄を多數に發行して之を韓人に無代價配布する事、韓國各地に時々衞生講話會を開く事、及び韓國

官民を勸誘して同會衛生事務講習生たらしむる事等種々の計畫を實行する筈なりと

▲大阪及神戶のペスト　大阪に於て昨年五月ペスト發生以來、患者總數は百三十二名にして、內死亡せるもの百二名なるが、本年に入りて發生せる新患者は九名なりと尙ほ神戶に於て、始めて發生したるは、昨年八月中なるが、爾來九十三名の患者を出し、內死亡せる者六十八名にして、本年に入りては一名の新患者發生したるのみなり

▲山口のペスト　去十二日長門町に於て男十一名擬似黑死病に罹り死亡したり

▲神戶大阪のペスト費額　昨年十月下旬神戶大坂の兩地にペスト病の發生せし以來其の勢ひ猛烈を極め日として新患者の發生せざるはなく兩地の當局者は頻りに其の豫防撲滅に盡瘁しつゝあるが是が爲め初發以來今日迄支出したる費額は大坂四十七萬圓神戶十七萬餘圓の巨額に上りたるも病勢は尙ほ衰滅に至らざるを以て右兩地の縣廳は更らに新たなる施設をなす爲めに尙ほ幾干の新支出を決議する由なり

▲捕鼠勵行　捕鼠の數は年末年首に際しては、著しく減少するは殆んど每年の例となり居るが大坂、神戶、門司、馬關等に於けるペストの病勢は頗る猖獗を極め居るを以て警視廳第三部にては此際市と交涉して大に捕鼠を勵行せんとて協議中なりと

▲鼠の統計　警視廳第三部にて調査せし昨年一月より同年十二月に至る市內捕鼠の數は百五十三万四十二頭にして又た斃鼠の數は三万四千五百卅三頭合計百五十六万四千三百卅三頭內有菌鼠七十六頭なりといふ

▲消毒用器具貸與　ペストの最流行地と認定せられたる大阪市に於ては東京市に向け消毒用喞筒二百個の借入れ方を申來りたるを以て警視廳にては其の請求を容れ當時不用に屬するもの二百個を取揃へ貸與することゝなり旣に輸送の手續を了たる由

▲鼠代金六万圓　昨年一月より十一月迄に其筋にて取調べたる捕鼠は百四十二万九千八百五十七頭、斃

鼠三万二千四百九十九頭又先月一日より廿二日迄の捕鼠は七万六千三百五十三頭にて斃鼠は千五百七十一頭總計百五十四万〇二百八十頭此買上代金を平均一頭四錢と見積ば（三錢の時ありし故）六万千六百十一圓二十錢を支出せし勘定なり

大日本婦人衛生會記事

●新年會

一月十三日第二土曜日午後一時半より神田區一ッ橋なる女子職業學校に於て本會々員相互の禮を兼ね新年會を開きたり總裁宮殿下にも御臨場遊ばさるゝ御豫定なりしも葉山なる御別邸へ成らせらるゝ當日とて御枉駕あらせられざりしも鍋島會長以下役員には緒方悦子、小川孝子、長谷川仲子、鳩山春子、宮本樂子、岡田德子、羽田三緒子、高木かう子、田村き代子、松平芳子其他の諸氏にて濱尾副會長には舊臘御愛孃御逝去の爲め御遠慮遊ばさるとて寄附の品を添へて申越されたり一同席定まるや鍋島會長より新年の御言葉あり次てドクトル富士川游君には疾病の話と云へる演題にて種々の譜圖掛圖等を示し當日は新年會の事なれば其發端を簡短に講話せられ次に餘興に移り講談師松林伯知には巧に大久保彥左衛門滑稽談及日本海大海戰露艦全滅の一齣を演ぜしが時々笑聲沸くが如く大に新年會の興を添へたり右終りて一同休憩紅茶、菓子、蜜柑等を饗し相互新年の禮を取かわし懇談に時を移し何れも歡を盡して四時半頃散會せり

當日の寄附左の如し

一金五圓（蜜柑として）　會長　鍋島榮子
一蜜柑　貳箱　副會長　濱尾作子

●濱尾夫人愛孃の逝去

正三位勳三等濱尾新氏夫人作子の方には長女淑子次女淳子の二孃あり長女は理學博士渡瀨庄三郎氏夫人となり次女は外交官萩原夫

人となり現に韓國にあり何れ劣らぬ家庭なるが夫人には家政監督の外幾多の婦人會に力を盡され殊に本會の爲めには創立以來二十餘年一日の如く熱心に盡力せられ又波瀬博士宅には淑子夫人が二名の愛兒あるに去年の夏この方病床に呻吟し居らるゝを特に心を懸けさせられ日々何度となく來往して何呉れとなく面倒を見られ居られしも良人新氏には東大學の騷動にて出入常ならず來訪客の絶えざる折柄なりしも常に本會の事は心に懸けさせられ去月の例會にも一寸と見へられて是れより大學へ愛孃を見舞ると申し置かれしが其後愛孃にはあらゆる國手の治療を受けられしも命なるかな舊臘十二日の夜に至り病俄に革まり二十七歳を一期とし二女を殘して哀れ黄泉の客となれたる痛ましさに良人新氏には大學總長に新任せられたりと發表の當日亡き愛孃の遺骸を染井の露深き墓地に葬らんとは其心事こそ推し圖るだに涙の種なりかし

右に付本會々長よりは吊詞を呈し御葬送當日は事務所員會葬せり

山形支會報告

十二月例會

十二月九日第二土曜日午後一時より女子師範學校内に例會を開く岩本副會長を初め幹事會員諸氏來會津田校長、北島醫學士出席せられ例の如く割烹實習あり折柄當日の講師の方より俄に差支出來欠席の旨通知ありたれは當日は講話を休み納會にもあればとて諸氏にて新年會の相談の爲め茶話會を開き四時頃散會せり

高崎支會報告

第三十九例會

去十二月十日第二日曜日午後二時より高等小學校に開く星野會長開會を告げ講師陸軍三等軍醫正林𨻶禮君登壇清國と韓國の婦人に就てと云へる題にて兩國婦人の差異等を詳細に述べられたり閉會を告げしは

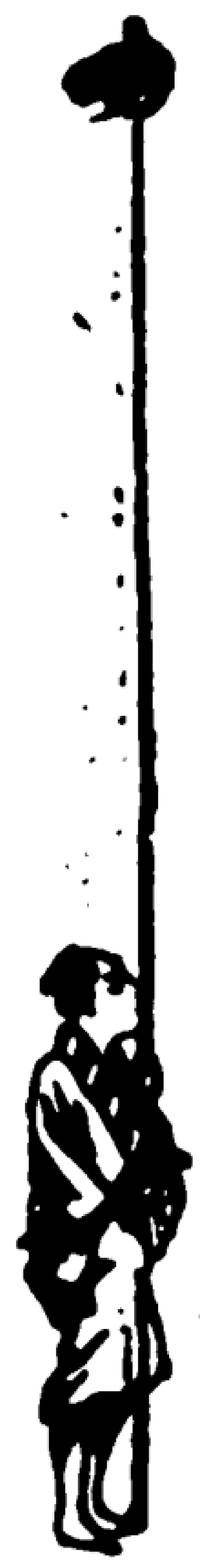
四時なりしと當日の出席役員は

星野會長、相川、本多、齋藤、高草木、

新潟支會報告

新年會

一月六日午後一時より新潟市なる女子高等女學校に於て同支會及同市婦人教育會、帝國婦人協會の三會聯合の上新年會を開催し戰死軍人遺族をも招待し有益なる講話、美妙なる音樂、餘興等あり頗る盛會なりしと當日の出席者には軍人遺族四十六名を合はせ二百三十名なりしといふ



○本會入會者

○伊豫高田直子紹介

●大阪市南區天王寺師範學校前　通常　岸　松子

○事務所申込

●淺草區須賀町明治病院内　通常　山本かよ子

○大學諏訪なみ子紹介

●青森縣三戸郡八戸町字八幡町　仝　植村みわ子

○米澤支會入學者

甲　中山幸子

甲　世間瀬やゑの

甲　菊池こう子

○高崎支會入會者

○飯島とく子紹介

●仝市八島町　通常　清水なか子

○相澤小松子紹介

●仝市連雀町　仝　樋口てる子

●仝市北通町　仝　野崎みね子

○岡峯ちか子紹介

●仝市田町百二十六　仝　新井とう子

○添田ふさ子紹介

●仝市若松町　岡部あい子

○姓名變更

●賛成員乾宗太郎君改メ　乾てい子

●横田はな子改メ　横田たけ子

原田基礎子改メ　藤本竹土子

汲川みわ子改メ　汲川れつ子

新刊寄送書

シー、エイツチヘート原著
吉川潤二郎譯述

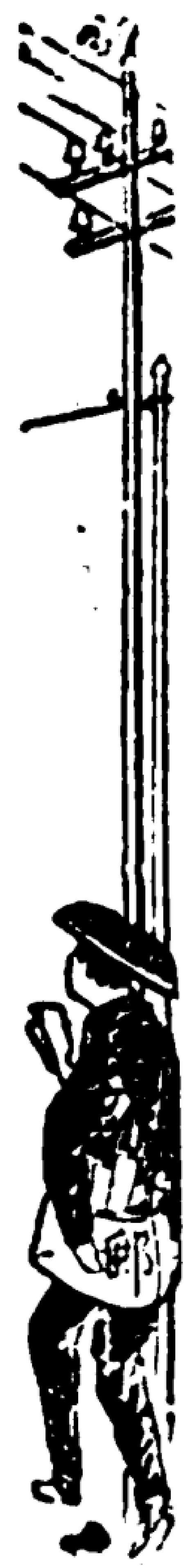
人生の行路　第三篇　定價三十錢

發行所本郷區駒込西片町十番地　内外出版協會

本會は第二篇に續き人生行路の指南車とも云ふべき要目を擧げて論述したるものにして其項目は左の如し

交際社會、禮儀、郷黨、女子の交際、婦人の勢力、女性の實務、淑女の生活、家庭の團欒、快樂、大笑、會話、挨拶、容貌の艶美、衣服の整頓、流行と奢侈、職業と事務、書籍、音樂、暗涙一滴、成功の要訣等

何れも吾人の品性をして高尚ならしむべき訓戒を網羅したるものなれば蓋し成年男女の恰當の良書なり



○轉居

●小石川區久堅町八十へ　藤本浪子

●日本橋區久松町三十五へ　吉居すゑ子
●本郷區駒込西片町十、にノ三十九號へ　高倉つな子
●赤坂區青山南町二ノ七十へ　遊奘いはほ
●高知縣高知市築屋敷十六へ　吉野伸子
●北豐島郡日暮里村金杉二百十二へ　吉田庸子
●本所區向島須崎町二百七十七へ　林榮子
●芝區高輪南町四十七へ　金原てい子
●神奈川縣大磯町字台町へ　阪本ちゑ子
●芝區三田四國町十五、五號へ　佐藤うた子
●石川縣能登國鳳至郡輪島鳳至町へ　久保登茂子
●姫路市神谷大神町黑坂方へ　乃木千世子
●千葉縣佐倉町高宮小路二十九へ　岩佐くに子
●長野縣上伊那郡片桐村南田島へ　井上ぎん子
●神戸市中山手通六ノ三十五へ　高木操子
●府下北品川百五十四へ　南條榮子
●本郷區湯島天神町一ノ十五、平田方へ　關野秀子
●赤坂區青山南町二ノ四十二へ　古川榮君
●赤坂區高樹町三へ　大井上かれ子



寄送交換雜誌（十二月分）

●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　日本赤十字發行所
●日本婦人　府下豐多摩郡澁谷村字常盤松御料地内　帝國婦人敎會

●新潟縣衛生會雜誌　新潟縣廳內　新潟縣衛生會
●衛生協會雜誌　日本橋區永久河岸八號地　日本橋區衛生協會
●日本の家庭　神田區裘神保町二　同文館
●統計集誌　京橋區山城町六　東京統計協會
●東京藥事新報　京橋區桶町四　東京藥事新報社
●東京市教育會雜誌　東京市役所內　東京市教育會
●東京小間物化粧品商報　日本橋區馬喰町二ノ十九　東京小間物化粧原卸商事務所
●女醫界　東京牛込區市ケ谷河田町　東京女醫學校
●なてしこ　麴町區下二番町三十七　大日本女學會
●大坂醫學會雜誌　大坂市東區淡路町一ノ卅八　大阪醫學會
●家庭新聞　熊本市內坪井町百五十八　家庭新聞社
●家庭雜誌　麴町區元園町一ノ二十七　內分社
●家庭　東京巣鴨二二五五　家庭社
●家庭の栞　新潟縣女子師範學校內　新潟縣女子教育會
●家一庭　福岡市船町十七　家庭新聞社
●大日本婦人教育會雜誌　麴町區永田町一ノ十九　大日本婦人教育會
●大月本耳鼻咽喉科會々報　東京醫科大學耳鼻咽喉科醫局內　耳鼻咽喉科會
●大日本私立衛生會雜誌　京橋區宗十郎町七　大日本私立衛生會
●體育　府下荏原郡大井村字北濱川　日本體育會
●通俗衛生　大坂市西區土佐堀通三ノ二十九　大阪私立衛生會
●牟婁新報　和歌山縣西牟婁郡田邊町上屋敷町六十五　牟婁新報社

●藥學雜誌　牛込區下宮比町八　日本藥學會
●藥石新報　大坂市西區江戸堀下通三ノ三十六　藥石新報社
●藥業時報　神田區鍛冶町二十一　藥業新報社
●經濟新報　麴町區永田町二ノ七十三　經濟新報編輯部
●婦人世界　大坂市南區末吉橋通四ノ六十三　浪華婦人會
●婦女新聞　牛込區東五軒町四十一　婦女新聞社
●婦人新報　赤坂區榎坂町五　婦人新報社
●婦人と子ども　本郷區女子高等師範校內　フレーベール會
●福田會月報　麻布區麻布笄町百三　福田會育兒院
●國家醫學會雜誌　本郷區富士町一　國家醫學會雜誌發行所
●工手ノ母　大坂市北區西野田新家四の町番外三二五　工手の母新聞社
●交通世界　埼玉縣浦和町三九三五　交通協會
●衛生報知　神戸市相生町一ノ二十七　私立神戸市衛生會
●越佐教育雜誌　新潟市東仲通一番町三七　越佐教育雜誌社
●英學生　神田區駿河台北甲賀町十　東四社
●衛生新報　下谷池ノ端仲町十九　衛生新報社
●愛國婦人　麴町區飯田町一丁目　愛國婦人發行所
●曙光　埼玉縣埼玉郡越ケ谷町百四十九　曙社
●草樂新聞　大坂市南區心齋橋筋二ノ百七　草樂新聞社
●産科婦雜誌　日本橋區濱町三ノ七　日本産科婦協會

●埼玉衛生新誌　埼玉縣北足立郡浦和町二三五　埼玉衛生新誌社

●躬行會叢誌　芝區三田綱町一　躬行叢誌出版部

●兒童新聞　神田區末廣町十　兒童新聞社

●神經學雜誌　小石川區駕籠町東京醫科大學精神學教室內　日本神經學會

●廣島衛生醫事月報　廣島市猫屋町　廣島衛生醫事日報社





私立大日本婦人衛生會

山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を撰任す役員の任期は一ヶ年とす●第三條 本支會は毎月一回（第一日曜日）講話會を開き毎年一回（五月）總會を開き講話の外役員の撰舉庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出つべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は精誠質素なるを要す上着及羽織は絹布を用ひるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會

宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ヶ年トス●第參條 毎月壹回（第一日曜日）講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ脱會又ハ本會ヲ退會セントスルトキハ其旨事務所ニ届出ヅベシ●第五條 本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條 本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條 講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又ハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聽セシムベシ●第八條 服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上着及羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ第九條 特ニ支會規則ニ掲ケザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

明治三十四年二月三日創立

事務所宇都宮市馬場町

宇都宮支會

私立大日本婦人衛生會

米澤支會規則

第一條 當會は私立大日本婦人衛生會米澤支會と稱し衛生上の研究を目的とし互に智識を交換し社會の幸福を增進するにあり

第二條 支會事務所は當時假に免許町一三六九番地猪股方に置く

第三條 當支會に會長一名副會長一名幹事五名を置く其任期は各一年とす

第四條 毎月一回（第二日曜午後一時より四時迄）講話會を開き毎年五月總會をなし役員改撰庶務會計等の報告をなす

第五條 入會は會員の紹介を經て宿所姓名に會費を添へ事務所へ申込又退會せんとする者は其旨事務所に届出べし

但し已納の會費は返附せず

第六條 當支會の會費は左の三種として 特別會員毎月金參拾錢通常會員甲毎月金拾五錢乙毎月金五錢前納するものとす

但會費拾五錢以上納むる者には本會雜誌を配附す

第七條 會費は雜誌料として本會へ納め一部は支會經費に充て殘餘は銀行へ貯蓄して支會事業の資金となす

第八條 會員及員外篤志者より金品の寄贈あるときは役員協議の上特待員又は贊成員となすへし

第九條 講話の節は汎く婦人の傍聽を許す

第十條 支會々員は質素を旨とし集合の際は可成木綿服を着用する事

第十一條 特に支會則に掲けさるものは本部の會則を準用す

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

私立大日本婦人衛生會 茨城支會規則

開設の趣旨及目的　凡人生の幸福を保持するには完全なる教育を望まざる可からず之を望まんとするには必ず衛生と相竢ちて而る後始めて全き事を得るならん。されば吾人は現今東京に於る該本部に臨じて更に茨城支會を開設し吾人が日常實行する衛生の事項をして益研究し益改善を圖りて其の發達を互に努め力めんとするに在る而已●本會は私立大日本婦人衛生會茨城支會として之を當水戸市に置く●本支會々員たるを望む婦人は何人にても入會することを得●入會手續入會の節は氏名族籍住所等を明記し本支會事務所に申込むものとす。但し會員證は東京本部へ通知し然るのち之を交附すと雖とも徽章代は豫め前納せらるべし●會員種類會員を分ちて特別。通常。終身の三種とす終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三十錢以上通常會員は一ヶ月拾五錢を納むるを●男子にして本支會の趣旨を贊成する者は之を贊成員とす●本支會員は本部にて毎月發刊する雜誌を無料にて受くることを得●退會せんとするものは其旨本支會事務所に報知すべし。(死亡等は親戚知人より通知せらるべし)●本支會に左の役員を置く支會長一名、副支會長、幹事六名、評議員十名、書記、會計、庶務は幹事中より各二名づゝ互撰分擔す●役員は任期滿一ヶ年とし毎年五月總會に於て投票を以て之を定む●集會は例會總會評議員會及臨時會とす集會八月を除く外毎月一回第三の日曜日に之を開く總會は五月適宜の日を以て之を開く急要の件あるときは臨時會若くは評議員會を開きて評議する事あるべし●毎會學識經驗ある知名の士に囑托して衛生上の講義演説又は之に關したる實驗等をも爲し本支會員に聽講せしむ但會員は知人家族等誘引して參會することを得(此際出席の衣服は總て質素たるべし)●會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は會費を滯納するものある時は本支會長評議會の決議を經て除名する事あるべし●茲に記述したる數項の他その必要と認むべき事項あらば成る可く本部規則を適用するものとす

明治三十四年十月創立　水戸市上市田見小路二十五番地　茨城支會

私立大日本婦人衛生會 高崎支會規則(明治三十五年四月創立)

●第一條　當支會は大日本婦人衛生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するを目的とす●第二條　當支會は大日本婦人衛生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄居町五十番地に置く●第三條　當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●第四條　本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を詳記し三個月分以上の會費を添へ申込まるべし●第五條　當支會に學術其の他の裨益を與へらるゝ人士を推して講師又は篤志贊助員となす●第六條　當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし●第七條　支會に左の役員を置く會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名●第八條　役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す又幹事評議員は役員中より會長之を指名す但役員の任期を一箇年とし再撰するを得●第九條　本會の特別贊成員を定員外の評議員とす●第十條當支會は毎月一回講話會を開き毎年一回總會を開く者とす總會に於ては講話の外役員の改撰會務の報告等をなす●第十一條　會員及贊成員の家族並に篤志贊成員は集會に參列するを得但時宜により男子の參列は謝絶することあるべし●第十二條　本會々員は本會費の外別に支會費を要せず支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす●第十三條　總て會費の徴收は集會の席上に於てするを例とす但三箇月分以上宛前納すべし●第十四條　支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす●第十五條　會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す●第十六條　本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす●第十七條　會員は服裝其他を質素にし集會の節は時間等を確實に履行すべし●第十八條特に此規則に掲げざる者は本會の規則を準用す

●事務所　高崎市寄合町五十番地　高崎支會

月刊

産科婦雜誌

毎月一回五日發行（見本郵着金拾三錢 一ケ年前金郵税共金壹圓）

本誌は日本産科婦協會の機關にして創刊以來六星霜を閲し今茲に第七週年の初めに當り內容を整理し左の各欄に分つ

〔時論〕には主として時事問題につき穩健なる評騭と諸家の意見を紹介し〔原著及實驗〕〔臨床講義〕の二欄には斯學の精粹を蒐む〔家庭〕には家庭衛生に關する講話〔家庭問答〕には家庭に關する質疑に應答し〔前月中の新聞雜誌〕にはこの紹介すべきものゝ要點を抄出し〔高等産科婦養成所講義〕には養成講師の講述また執筆せるものを收む

發行所 東京市日本橋區濱町三丁目七番地 産科婦人科楠田病院內 日本産科婦協會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章

第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢

●第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章

第一號　七十錢（黑塗箱入送費九錢）　六十錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する塲合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼ね會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なりとも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京牛込築土八幡町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈

本誌一部定價貳拾錢

東京市牛込區上宮比町八番地
發行所　私立大日本婦人衛生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行者　田中德三郎

東京牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

印刷所　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

明治三十九年一月二十日印刷
仝年一月二十五日發行（毎月一回二十五日發行）
婦人衛生雜誌第百九十四號